傾城水滸伝　第八編ノ壱　曲亭馬琴著　歌川国安画
文政十三年庚寅春正月吉日新版　　江戸通油町書林鶴屋喜右衛門梓

▼：改頁　☆：未翻訳

第七編に説き漏らしたる晝鼠の白粉が何時の程にか近江の賤の砦へ馳せ加わって、三世姫に仕えまつる事の由を尋ねるに、此の年の夏はいとひどく雷が鳴る事しばしばなりしで、ある日又、夕立雨に風さえ荒れてすさまじく、世は常闇となるまでに驚く雷電に家鳴り響いて耐えられず、人は門の戸さし固め、行き来も既に途絶えたり。

さる程に雷があちこちへ落ちたるが、なかんづく難波の領主天野の判官遠光の居城へは三所ばかり落ちる程に、事に牢屋ははなはだしくて梁を打ち挫き柱を倒したりければ、内に在りける罪人らが或るいは雷火にうち殺され、或るいは棟木に押し潰されて死なざる者が無かりしかば、隣の牢屋に繋がれた白粉の夫の髪八もいかでか逃げられるべき。臍開け身はふすぼりて、そのまま息は絶えにけり。女の牢屋も棟続きにて等しく崩れし事なれば、白粉も息は絶えながらも幸いにしてなお死なず、しばらくして息吹き返し辺りを見るに、我に等しき罪人は皆死ぬが牢屋崩れて便りを得たり。この時早く逃れ去らずば弥勒の世※までいで難からんと思えば板塀の崩れより辛くして潜り出るに、辺りに流人は無きのみならず、降る雨篠を突く如く射干玉の夜に異ならずば、人皆恐れて籠もり居つ。これを知る者無かりけり。

かくてぞ白粉は闇に紛れて裏門より走り出て、その終夜道を走って第三日の真昼頃に江鎮泊に到着しつつ、小蝶、呉竹らに対面して、雷火で牢屋を逃れし事、▼且つ夫の勝栗返の髪八はそこにて命を落としたる事の由を告げにければ、小蝶は救うに由無かりし白粉が逃れて来たのを喜び、又、髪八の死を哀れんでいたわる事大方ならず、次の日三世姫の見参に入れ奉り、朱西の次にはべらせて、その後髪八の為に何がし寺にて追善の法事を執り行い、その菩提を弔いければ、白粉は小蝶の恩を感じて忠義の志をぞ励みける。

※弥勒の世：遠い未来。弥勒菩薩は釈迦の入滅後 56 億 7 千万年後に姿を現わし、多くの人々を救済するとされることから。

〇これはさて置き（閑話休題）、春雨の大箱は故郷の母親の病重しと聞こえし時、越前の引田の里にて燕、石竹らに立ち別れ、一人難波津を指して急ぎつつ、三日四日の程にして宋公明村へ近くなりぬ。その時春雨が思う様、

「・・・・・昼は人目がいぶせくて（煩わしくて）※、我が家の近くは寄りも付かれず、日暮れてこそ」と思案をしつつ、その夕暮れに笠深くして宋公明村を指して赴く程に、彼の曙の出茶屋の主人の与五平の居宅の辺を心ともなく過ぎるにぞ、再び心に思う様、

「・・・・・彼の与五平は人の上に真がある者なれば、我れが立ち帰りし事を知るとも口を聞くべき者にはあらず。立ち寄って故郷の事の様子を聞かばや」と思いにければ外の方より内の様子をうかがうに、此の時、黄昏なりければ、与五平は宿所へ帰って火を打ちていたりしが、付け木に移す火影にて春雨を見て驚き、

「御身は久しく家出をなされて御行方だに知らざりしに、つつがも無くて帰らせたまうは喜ばしくこそ候なれ」と云うに春雨は声を潜めて、

「知られる如く日陰者の我が身ながらに、肝太くもここらへ来らるべくもあらねど、母親の病気が大方ならず重らせたまえば、会わま欲と聞こえたる妹園喜代の消息（手紙）が届きし日より、夜の目

も合わず道急がして来たるなり。いかに我が母の事の様子を伝え聞いたる事あれば、知らしたまえ」と詫びしげに問えば、与五平は微笑んで、
「そは空言にてあらんずらん。御身の母御は昨日も今日も御組縄手の婆様と弁舌寺の談義を聞きに行くとて、我らが茶店に立ち寄ってしばし憩いたまいにき。さるを大病なんどとは心得難き事にこそ」と云うに春雨は疑い起こって、又、問う由も無かりけり。

※難波津 （なにわつ）:古代大阪湾に存在した港湾施設の名称。現在の大阪市中央区付近に位置していたと考えられている。

しばらくして春雨は更に又、思う様、
「・・・・此の与五平には去ぬる頃、石塔料を取らせんと再び三度云いたるに、彼の義太吉の事が起こりて、我れが影をしも隠せしかば、今に至って金子を取らせず。路用の蓄え多かるに我が偽らぬ事の心を知らせんものを」と忙わしく懐をかかぐって金四五両を取り出して、
「与五平お爺よ。去ぬる頃、亡き人の石塔料を参らせんとしつる折、我が紙入れを義太吉の宿所に残し置きしかば、そを取らんとて立ち戻りつつ、災いそこに起こりしより、会う由も無くなりにけり。これ受け納めたまえかし」と云いつつ渡す五片の小判を与五平は押し戻し、
「此は思い掛けも無き。昔が昔であるならば、かかる御恩にも預からめ。今はあちこちさ迷いたまう御身の路用をいかにして賜れはとて受け取れんや」▼と否むを大箱押し返し、
「否、私は行く先々にて人の情けが大方ならねば、路用は今も余りあり。否むは要無き事なりかし」と諭して金を渡しつつ、暇乞いして出て行けば、与五平は感涙を拭いもあえず、押し戴くは情けの五両。暮れ六つの鐘を惜しまぬ大箱はその宵闇を縁にて宋公明村へと急ぎけり。

※いぶせし：①ゆううつだ。 ②煩わしい。窮屈だ。不快だ。③けがらわしく、気味が悪い。

〇かくて大箱はその夜五つの頃おいに、親の宿所に近づいて背戸の方より入らんとせしを奴婢らが早く見出して、「只今帰らせたまいしか。いざ此方へ」と諸共に出迎えつつ、小盥に湯を汲み入れて足を濯がせ、もてなし大方ならざれども大箱はなお落ち着かずに諸人にうち向かって、
「母様は去ぬる頃より御心地は例ならず、重らせたまいぬと聞こえしが、昨日今日はいかにぞや」と問われて奴婢らは微笑んで、
「否、御隠居様は御機嫌良く、今日も弁舌寺の説法を聴聞に行かせたまいつ。黄昏頃に帰らせたまいて納戸に伏して居わしますめり。草臥れたまいし故にこそ」と云うに大箱は呆れ果て、又、問う由も無き折から、園喜代が姉の声を聞きつつ奥より走り出て、つつが無き対面の喜びを述べれども、大箱は耳にも掛けず腹立たしさに声苛立てて、
「園喜代、そなたは大胆なる。つつがも無くてましますを御命危うしと告げ越したるはいかにぞや。はら母☆かくと聞きしより、御臨終に得会わずば自害をせんと思いつつ、夜の目も合わず幾ばく里の道を急いで立ち帰るに家は元より無事にして、母上つつがましまさずと聞く喜びに付いて、又、心得難きはそなたの空言。一人の親をもて遊び、姉を欺く大胆不敵。真に烏滸の痴れ者かな」と息巻く声が漏れ聞こえてや、母の妙子が忙わしく納戸より出て来て、
「大箱、帰りたまいしか。私の病気が重しと云いこしらえて呼び寄せしは園喜代の業にあらず。私が彼女に云いつけて、文を書かして石竹殿に頼んでそなたを驚かせしは一日も早く帰れかしと思いし親の仕業ぞや。とばかりにては事の心を定かにはなお知る由無からん。そなたの事は朱良井と稲妻

の刀自の情けにて、詮索沙汰もそれなりに今では尋ねる者も無し。されば朱良井と稲妻は近頃殿の仰せを受けて、一人は鎌倉へ遣いに赴き、一人は又、太宰府へ旅立ちたりと聞こえたる。その間の留守替え役には鷲塚身太夫と云う和郎が折々ここらを巡るのみ、波風立たずになるに付けても、そなたは又、あちこちに山籠もりせし謀反人らと浅からず交わって、そこを縁にしつる由、風の便りに聞こえしかば、胸安からぬ親心。いかでそなたを謀反人の友にはせじと思うになん。一日も早く呼び寄せんとて、無き事告げしは親の慈悲。思い違えて園喜代を必ず叱りたまうな」と説き諭したる母親の言葉に大箱は驚き恥て、

「身の慎みの良からぬ故に此上無き災いを引き出して、御苦労かけし不孝の娘を憎しとは思し召さで、▼かくまでに計らいたまいし御慈しみこそ有り難けれ。我が身の詮索緩まれば、今よりここに忍び居て孝養を尽くしまつらん。御心安く思いたまえ」と慰められて、母親は喜ぶ事大方ならず、やがて納戸へ伴って、親子姉妹しめやかに過ぎ越し方を語らう折から、俄かに込み入る捕り手の頭人。鷲塚身太夫がいかめしげに数多の組子を従えて、前後の門より乱れ入り、

「去ぬる年、弾き語りの義太吉を斬り殺して逐電したる罪人大箱。今宵密かに立ち帰り親の宿所に隠れ居る由、ここらを見巡る組子らが早嗅ぎ付けて定かに知れり。さぁさぁ出て縛めの縄に掛かれ」と呼び張ったり。

「あなや」と驚く母親は園喜代諸共走り出て、身太夫にうち向かい、

「大箱は去ぬる頃、逐電せしより行方も知れず、さるを立ち帰りしと云う者は見違えたるにぞあらんずらん。漫ろにて逸りたまうな」と云わせも果てず身太夫は眼を怒らし声振り立てて、

「この老いぼれが猛々しさよ。後を付け定かに見留め、絡め捕らんとて来る者が見違える由あるべきや。なお争えば家探しせん。者ども進め」と息巻いたり。

　大箱これを立ち聞いて、母親を招き近づけ、

「事既に露れたれば、今は逃れる道も無し。つらつら物を案ずるに、日陰者にてあらんより一旦罪を被って、赦免に会えば世の中が広くて後ろ安かるべし。伝え聞くには鎌倉にて将軍の公達（子弟）※が生まれさせたまいしかば、やがて大赦を行われて国々の罪人まで許させたまうと風聞あり。かかれば私も人殺しの罪一等を許されて、島流しにもやなりぬべし」と云うに妙子はうち泣いて、

「うたてや、女の猿知恵にてそなたをここへ呼び寄せずば、かかる嘆きも無からんに、由無かりき」とかき口説く母をしばしば慰めたる。大箱は覚悟を極めて、いでて身太夫にうち向かい、

「私は先に逐電して、一旦は身の罪を逃れしかども、別れし親の懐かしさに今宵密かに立ち帰りしを早知られしは天罰ならん。いざいざ縄を掛けたまえ」と云うに身太夫は頷いて、

「さすがは大箱、健気な覚悟。此奴を厳しく縛めよ」と下知に従う組子どもは押さえて縄を掛けにけり。その時妙子は身太夫らを客座敷に休息させて、盃をすすめ、物を贈り、只大箱の事をのみかき口説きつつ頼みけり。既にその夜が明けしかば、身太夫は組子らに大箱を引き立てさせて、天野の城へ引き持て帰り、かくと注進してければ、天野の判官遠光は近侍の侍を従えて問注所に立ちいでつ、大箱を縁側の辺近く引き据えさせ、彼女が逐電したりける事の心を責め問えば、大箱はちっとも包まず、

「先に弾き語りの義太吉と物争いをしいだして、逃れ難き事がありければ、止む事を得ず義太吉に深手を負わせて逃げ去りつ。▼義太吉はその手にて遂に事切れたる由を伝え聞きつつ、一旦の身の咎を逃れん為に他郷へ影を隠したり。さばれ故郷の懐かしさに忍んで宋公明村へ立ち帰り、事現れて

かくの如く絡め捕られはべりしかば、いかばかりの御咎に行なわせたまうとも上を恨める由はべらず」と臆する気色も無く申せしかば、遠光はしきりに頷いて、その白状を書き留めさせて、大箱を牢屋に遣わし、その後宗徒の家の子（家臣）らを呼び集め、彼女の罪の軽重を評議、既にまちまちなり。

この時義太吉の母虎魚婆は世を去って、早半年になりぬ。又、彼の走書の安陀子は義太吉と訳ありし事がようやくに現れて、身の暇をたまいしかば何地か行きけん行方も知れず。かかれば又、今更に大箱を仇として支える者があらずなりしに、遠光の家の子（家臣）らは全て大箱を哀れんで助けばやと思うになん。言葉ひとしく申す様、

「大箱が人を殺せし罪は軽からざるに似たれども、彼の義太吉は悪少年にて大箱の恩を仇とせし、悪事ありと聞こえたり。これらの由をしかじかと鎌倉殿へ聞こえ上げ、死罪をなだめたまえかし」と皆まめだちて申すにぞ、遠光も又、大箱を助けんと思いしかば、「真にさなり」と喜んで、やがて鎌倉へ聞こえ上げ、執権義時の旨を得て、大箱の死罪をなだめ、上総の国の九十九里浜へ流し遣わすべしとぞ定めける。

是により遠光は烏賊場幾兵衛、木高記太郎と云う両人の走り遣（卒）いを大箱の宰領として、上総の国司へ由を告げる送り手形をもたらしつ、その日大箱を牢屋より出して首枷を掛け、流罪の由を述べ知らして、その配所へぞ遣わしける。

※公達（きんだち）：①親王など上流貴族の子弟。②あなた方。あなたさま。

〇されば又、大箱の母妙子は先に大箱が捕らわれて牢屋に繋がれたりし日より、食を贈り衣服を遣わし、又、遠光の身内人らに物を贈って頼みしかば、諸人いよいよ力を尽くして上総の配所へ遣わしけり。此の時の掟にて、罪軽るき咎人は離れ島へ流しやらず、あるいは上総の九十九里浜、出羽の牡鹿嶋なんどへ流されるも少なからず。およそかかる流人らは陸地より遣わして、宰領二人を添えられるが鎌倉よりの定めなり。さる程に大箱はこの日幾兵衛、記太郎らに送られて、配所へ赴くと聞こえしかば、妙子は園喜代と諸共に城下の町外れで出迎えて、その辺の酒屋に誘い、今ぞ別れの盃も取り上げかねし諸袖をしばらく顔に押し当てて、只さめざめとうち泣きしがようやくに涙を止めて、

「なう大箱、幾度云うても帰るべき▼時ならねども、呼び寄せて御身が絡め捕られしは皆これ我儕の過ちなり。さはさりながら、この日頃心尽くしの甲斐あって、そなたの命はつつが無く、しかも上総の九十九里は土地漁に富み栄え、いと賑わしき浜とぞ聞きぬ。只明け暮れに身を愛して、赦免の時を待ちねかし。我又、折を見合わし、園喜代を遣わして、そなたの安否を問わすべし。ついて此度の道中は白川越えして近江より木曽路を下ると聞こえたり。しからば必ず近江の賊が砦の麓路をたどり行く日があるなるべし。その砦の大将は予てそなたと交わり厚き、彼の多力の小蝶ならずや。彼の勇婦らが聞き知って、そなたを奪い捕らんとするとも、必ず彼の山に逃れて罪を増したまうな。心に掛かるはこの事のみ」と云うに大箱は一議に及ばず、

「仰せの趣は心得はべり。彼の人々に伴われて安楽に世を渡るとも、親姉妹に難儀を掛けて不孝の罪を増しはべらんや。その儀は御心安かるべし」と言葉を尽くして慰めて、又、園喜代にうち向かい、

「そなたは私になり替わり、母御に孝行を尽くしたまえ。よしや母御の仰せなりとも、私の安否を

問わんとて遙々上総へ来るべからず。片時も親の辺を離れずに良く仕えたまえ」と云うに園喜代も涙ぐみ、仰せを心得はべりにき、
「今日よりはなお神に祈り仏を念じて、御身の赦免を待つより他ははべらず」と親子姉妹が繰り返す、小田巻※ならぬ別れ路はいとど名残りを惜しまれる。

※小田巻（苧環／おだまき）：糸を繰る道具。くるくる廻ることから「繰り返す」という言葉の枕詞。

　さてあるべきにあらざれば、妙子は金一包みを大箱の路用に取らせ、又、二包みの白金を幾兵衛、記太郎に餞して、大箱の上を頼みけり。さらでもその両人は大箱が類い稀なる賢女なるを知りてければ、真実にいたわって敬う事大方ならず、云わんや今又、母の妙子に数多の金を贈られて、喜びつつ受け引いて、大箱を先に立たして、遂に酒屋をいでしかば、妙子、園喜代は幾町か送って袂を分かちけり。

〇かくて大箱は夜に宿り日に歩み行き行って、近江の賊が岳へ近づきぬ。その時大箱は幾兵衛、記太郎に囁く様、
「明日の道は世に名だたる江鎮泊の麓路を過ぎるにこそあらんずらん。彼の砦の大将の小蝶は私と相知れり。もしかくと伝え聞けば、道で私を奪い取り、砦に留めんと謀るべし。明日は努めて宿りを出て、彼の麓路を走り過ぎなん。この儀を心得たまえかし」と云うに両人頷いて、
「御身の了見、真に良し。明日は暁に発ち出て、とく小道より走るべし」と示し合わせつ、その明け方に宿りを出て急ぐ程に、賊が岳へ程近き一筋道を過ぎる折から、遙か向かいの森の陰より軍兵数多現れ出て、行く手の道を取り塞ぎ、関をどっと作りつつ、先に進みし一人の大将。これすなわち別人ならず、彼の赤頭の味鴨なり。幾兵衛、記太郎これを見て、魂も身に添わず、大地にはたとへたばり伏し、「大箱の刀自、我々を救いたまえ」と叫びけり。
　その時大箱は近づく味鴨にうち向かい、
「絶えて久しき赤頭の刀自。御身は私を遮り留めて、何とせられる事やらん」と問えば味鴨は微笑んで、
「そは又、問われるまでもはべらず。御身は先に引田の里にて▼人々を振り捨てて、一人故郷へ帰りたまいし。その事の趣を多力の刀自が聞きたまいて、必ず災いあるべしとて、やがて忍びの者をもて宋公明村へ遣わせて、事の様子をうかがわせしに果たして御身は捕らわれたまい、久しく牢屋に繋がれて上総へ流されたまう程に、此の麓路を過ぎらせたまう事が落ちも無く聞こえたり。よって小蝶の指図に従い、私はここにて出迎えて、御身を奪って砦へ伴い、受けたる恩を返すものなり。まず邪魔なるは送りの宰領、この世の暇を取らせんず」と云うより早く段平をきらりと抜いて斬らんとするを大箱急に押し止めて、
「やよ赤頭の刀自、待ちたまえ。この両人を斬らんとならば、我れが手づから殺すべし。さぁその刃を貸したまえ」と云うに味鴨は否むに由無く、
「そははがかりにには べれども、御身が望ませたまう事なれば。いざいざ」と云いかけて、そのまま刃を渡すにぞ、大箱これを受け取って、又、味鴨にうち向かい、
「赤頭の刀自、聞きたまえ。此の両人は主命を受けて私を送るのみ。恨みも無ければ咎も無し。まいてこの日頃より、私を懇ろにいたわって曲がれる事も無き者をいかにして殺さるべき。且つ

故郷を出る時に我が母が厳しく戒めて、賊が砦の人々に留められる事があれども、露ばかりも従うべからず。いかで配所へ赴いて赦免を待てと云われたり。かかれば砦に留まり難し。かくてこの両人を殺さんとならば、是非に及ばず、私がまず自害して、この人々と共に死なん。南無阿弥陀仏」とばかりに持ったる刃を取り直して喉へ突き立てれば、味鴨は驚き押し止めて、

「かくまで哀れみたまう此の宰領を殺さんや。必ず逸りたまうな」と言葉を尽くして止めにけり。

傾城水滸伝　第八編ノ二　曲亭馬琴著　歌川国安画

その時大箱は味鴨を見返って、

「御身は私を哀れんで自害を止めるものならば、さぁさぁ放ちやりたまえ」と云うに味鴨頷いて、

「私は小蝶殿の指図に従って御身を迎えの為に来たなれば、いかにとも計らい難し。呉竹の刀自も、又、山を下りて後より来れり。会って談合したまえかし」と云う隙に呉竹は進み寄りつつ、大箱にうち向かい、

「御身が真の道を守って配所に行かんと宣うを割無く止めんと云うにははべらず。たまたま此の麓路を過ぎりたまうを余所に見て受けたる恩を仇にやすべき。しばし砦に立ち寄って、小蝶の刀自らに対面したまえ。決して留める事にはあらず」と云うに大箱は否みかね、ようやくその儀に従うにぞ、味鴨も又、喜んで、

「しからば刀自の首枷をしばしなりとも外すべし」と云うを大箱押し止めて、

「此の首枷は国家の大法。いかでか私に▼外さんや」と否むを呉竹は笑いつつ、

「例え首枷を外すとも御身を砦に留めずば何事かはべるべき」と云うに大箱頷いて、

「智計の海の刀自ばかりは私の志を知りたまえり。しからんにはともかくも」と云うに味鴨近付いて、早く首枷を外しつつ、皆諸共にうち連れ立って賤の砦に誘うにぞ、彼の幾兵衛、記太郎はようやく生きたる心地しつ、おめおめとして従いけり。

既にして小蝶らは仲間の勇婦諸共に迎賢坂の辺まで出迎えて、大箱に対面しつつ、喜ぶ事大方ならず。そのままに手を携えて衆議廳にぞ誘いける。その時小蝶は大箱を上座に押し上して額を突きつつ、さて云う様、

「先には御身の情けによって我々七人は虎口を逃れ、三世姫に倶し奉り、御座を此の所に占めしより、かくまで奇角の勢いを張れる事は皆これ御身の賜物なり。まず緩やかに座したまえ」とて、やがて酒宴を設けつつ、大箱をもてなす程に、呉竹、薯、桜戸、味鴨、二網、五井、七曲、白粉、真弓、杣木、花的、秦名、黄葉、燕、腐鶏、雌雉、薄衣、筒鳥、石竹、赤西らまで一つ席にうち集い、皆大箱に盃をすすめて懇ろにもてなすにぞ、送りの宰領幾兵衛、記太郎は大箱の後辺に従い居て、共にもてなしにぞ預かりける。

かくて小蝶は大箱にうち向かって、

「春雨の刀自、願わくば此の砦に留まりたまえ。今の世の人の心は勢いに付いて義に疎く、弱きを脅して強きにへつらう頼もしげ無きものなれば、配所へ赴きたまうとも赦免の時には逢い難からん。まげてこの儀に従いたまえ」と云うに皆々言葉を揃えて等しく留めて止まざりしを大箱は請け

引かず、
「母の教訓しかじかなれば、よしや赦免に逢わずして配所の土になるとても、此の所には留まり難し。しかるを割無く云われれば私の心は安からず、早く放ちやられんこそ、此上無き情けなるべけれ」と固く否んで従わず、思い定めし気色なれば小蝶らは留めかねて、
「しからんには栓術無し。さばれ四五日逗留して姫上の見参に入り、緩やかに発ちたまえ」と云えば大箱は頭を振って、
「私が流人の汚れし身をもて、三世姫の見参に入り奉らんははばかりあり。今宵一夜さここに宿って、明日は努めて立ち去るべし。この儀を許したまえかし」と云うに小蝶は嘆息して、大箱が物堅き心映えをぞ讃えける。
　されば桜戸、真弓、杣木、朱西らは此の度大箱と初めての対面なれども、互いに宿世ある事なれば古き友に異ならず、いとまめやかに慰めければ大箱も思わず興に入り、終日語らい暮らしけり。

〇かくて次の日大箱は別れを告げて発ちまくせしを▼小蝶らしばしと押し止め酒宴を設けてもてなす程に、大箱は心ならずも遂に二三日逗留せり。「かくては配所の日限違って、事の難儀に及ぶべし」としばしば云うに留めかねたる小蝶は別れの酒宴を設けて、すなわち大箱に二百金を贈って餞とし、又、幾兵衛、記太郎にも金二十両を遣わしければ、幾兵衛らは夢かとばかりに喜ぶ事大方ならず。大箱は流人としてかかる大金を持ちたらんは宜しからずとて否みしかども、小蝶ら割無くこれをすすめて手づからその旅包みへ入れしかば、大箱はその志に戻らん事のさすがにて、喜びをなん述べにける。
　その時呉竹は大箱に云う様、
「春雨の刀自、上総の配所に赴きたまえば、私が一人を引き付けて、御身の助けにしはべりてん。彼処に一人の勇婦あり。女流人を預かって総頭と唱えられる彼女は不思議の仙術あって、一つの甲馬を腿に掛ければ、日に二十里の道を行くなり。もし火急の事のある時は四つ甲馬を腿に掛ければ日に八十里を走るも安かり。よって世の人あだ名して女韋駄天の夏女と呼びなしたり。私は彼の夏女とは年頃浅からぬ交わりあり。此の所へ移りし後は久しく訪れせざれども、今もつつがの無き由は風の便りに聞こえたり。此の文届けたまいね」と説き示しつつ認め置きたる文を取り出し渡しにければ、大箱喜び受け取って、その明けの朝、諸人に別れを告げて出て行けば、小蝶らの数十勇婦は麓の舟場まで是を見送り、味鴨も花的、燕らの数人は諸共に船に乗って朱西の酒店まで送りつつ、ここにて袂を分かちけり。

〇さる程に大箱は幾兵衛、記太郎らと諸共に又、幾泊りの旅寝を重ねつ、行き行って武蔵の浅草に程遠からぬ広沢村の辺に来にけり。この時午の半ばにて、物欲しく（空腹に）なるままにと見れば、この里外れに飯と酒を売る一つ家ありけり。ここにて腹を繕わんとて、三人ひとしく立ち寄りつ、店の方辺の小座敷へ草鞋解き捨てよじ上れば、主人と見えたる一人の女がにこやかに出迎えて、
「お客様方、よく来ませしな。飯を参らせ候わんか、酒をや召され候か」と問うを大箱見返って、
「否、我々は既に飢えたり。まず飯をいだすべく、酒をも少し飲ましてたべ」と云うに女は心得て、女川菜飯※に田楽の膳を手早く持て来てすすめ、又、銚子の酒を温めて、これを三人にすすめけり。その時幾兵衛らはまず大箱の首枷を外させて、三人はやがて団欒をしつつ、酒を飲み飯を食べて、

しばらくここに休息す。

※女川（めがわ）菜飯：東海道では近江の石部・草津間の目川（めがわ）の茶屋が，菜飯（なめし）田楽と呼んで売ったものが評判。

かかりし程に主人の女は退いて思う様、

「・・・・・あの女は流人にて二人の武士は宰領なるべし。今彼女らが▼旅包みをうち降ろす様子を見るに、いずれもいと重やかなれば内には数多の路用があらん。これまで日々に我が店へ来て、飲み食いせし者は多かれども、彼女らが如く銭金を多く持てるは未だ見ず。いかで密かに彼奴らを押し片づけて路用を盗らば、我が大望の足代（足場）※とならん。そうじゃそうじゃ」と心に目論み、やがて一間に退いて刀の寝た刃※を合わせしが、此の時心腹の小者らは近き辺りへ立ち出て、未だ一人も返らねば、更に又、思う様、

「・・・・・送りの二人は下司なれども、さすがに刀を帯びたれば、なかなかに侮り難し。相手は三人、我は一人。漫ろに逸って討ち漏らせば、後悔そこに立ち難し。さぁ小者らが帰れかし」と思えば門に立ち出て、しばしそなたを眺める折から二十歳余りなる一人の女と十七八なる二人の女がうち連れ立って来にけるが、主人の女を見て微笑んで、

「刀自は誰をか待ち詫びて、ここに佇みたまうぞ」と問われて主人も微笑んで、

「私は小者に所要あれども、彼らの帰りが遅かれば影もや見ゆるといでて居り。御身たちは又、何事あって、こう連れ立って、何処へとてか行きたまうぞ」と問い返せば、二十歳余りなる女は頷いて、

「否、私は昨日今日、出迎えせんと思う旅人あれば、此の道筋をあちこちと早両三日いでて居り。その旅人は別人ならず、御身にも予て噂をせし難波の書役の春雨の大箱の刀自になん。彼の賢女は斯様斯様、しかじかの咎により、此の度上総へ流されたまうが、此の道筋を過ぎらせたまうと近頃定かに告げたる者あり。よって此の姉妹と示し合わしつ、日毎に巷に立ち出て、逢わまく欲しと思えども、今日までもさる旅人が来るのを見ず。御身の店へはさる人が憩わざること無いかと事問わばやとて来るなり。いかにさる人が憩いし事はあらざるや」と問えば主人は声を潜めて、

「今我が店に立ち寄って、飯を食べ酒を飲み、憩い居る三人の旅人あり。その一人は女にて首枷を掛けられたれば、問わでも知るき流人なるべし。又、二人は男にて宰領の足軽ならん。御身達には隠すも要無し。その三人の旅包みのいと重やかに見えたれば、物ある事は知られたり。いかで彼奴を押し片付けて、軍用金の助けにせばやと思えども、折の悪くてまだ小者らが帰らねば手をも下さで待ちて居り」と云うに驚く三人の女、

「そは疑うべくもあらぬ、彼の春雨の刀自なるべし。私が垣間見はべらん」とて、二十歳余りの女が只一人、忙わしく家に入って障子の隙よりとくと見て、退き出て囁く様、

「私とても彼の刀自に一度も会いし事が無ければ、見ると云えどもその人なるか、それならざるか、わきまえ難し。古のことわざにも、名を聞くは面を見るにしかず、面を見るは名を聞くに勝れりと云はずや、今、目の当たりにその名を問うて疑いを晴らすべし」と云うに皆々「実にも」と答えて等しく座敷に赴きつ、二十歳余りの女は先に進んで大箱にうち向かい、

「事、卒爾にはべれども、御身は難波の御書役なりし春雨の刀自ならずや。大箱殿にはべらずや」と問われて大箱は驚いて、

「真に問わせたまう如く、私は難波の書役なりし春雨の大箱なり。御身らはいかなる人ぞ」と問

われて喜ぶ此方の女は
「あぁ危ういかな。危うかりし」と一人語ちつつ身をひるがえし、三拝して、さて云う様、
「今日までは縁無くて未だ見参に入らざりければ、疑いたまうも道理なり。私が事は浅草の里に住まいして、数多の川船を人に貸しつつ、息を取り世を渡る琴樋と云う者なり。船は宮戸川にあるをもて、世の人私をあだ名して都鳥の琴樋と呼びなしたり。又、これなる姉妹は姉を夕虹の日熊と呼びなし、妹を春霞の龍間と呼びなしたり。二親は世を去って、方便※無き者どもなれば、私の宿所にかかり居て、漁して世を渡れり。彼女らの親も私の親も範頼朝臣に仕えまつりて、足立の石戸に在りけるが、範頼朝臣は彼の里にて▼自殺して失せたまいしかば、親どもは世を忍んで、この地に移り住みしより、民間に落ち下りつ。私に至って二代なり。しかるに御身の賢女なるその名はここらまで隠れ無ければ年頃慕わしく思いしに、此の度しかじかの事により上総へ流されたまう由、定かに告げし者あれば、居つつここにて出迎えんと思うにより、両三日、湯島、千束を徘徊したるに、真心の空しからず、名乗り合い奉る喜び、これに増すもの無し」と、一部始終を告げ知らせれば、日熊、龍間も諸共に志を告げ喜びを述べ、大箱を拝しけり。
　その中で主人の女は面目なげににじり寄り、
「春雨の刀自、許させたまえ。私は和泉の三郎忠衡の家の子（家臣）なりし、何がしが娘なり。故主なりける忠衡は義経朝臣と共に高館にて討ち死にせし頃、我が父は揚巻（少年）なりしが、遠く武蔵に落ち留まり、商人となり果てて妻を迎え、私を生まして世を去りはべり。母も空しくなりしかど、大望あれば夫を迎えず、女世帯に年頃をこの所に過ぐせども、故主の仇を報わんと思う事しきりなり。しかるにこの琴樋の刀自は武芸抜群なるにより、交わりを結び、忍び忍びにその大刀筋を習い得たり。かくて今日図らずも御身がここへ憩いたまいしを春雨の刀自とは思いも掛けず、路用多かる旅人と推して害せんと思う悪心起こり、刀の寝た刃を合わせしかども、身一つにして三人を討ち果たさんとの事は心元なく、腹心の小者らが帰らば助太刀させんずと思う折から、都鳥の刀自らに問われて事を果たさず、遂に御身を春雨の刀自と知っての悔しさは言葉に述べも尽くし難かり。私が名は枸橘なり。されば世の人あだ名して針目衣の枸橘と呼びなしたり。願うは罪を許させたまいて、都鳥、夕虹、春霞の三勇婦と等しく御目をたまわれかし。面目なや」とうち詫びて、額突き伏してぞ敬いける。

　大箱は四人の勇婦の物語りに且つ驚き且つ喜んで、忙わしく礼を返しつ助け起こして、
「物数ならぬ私なるをかくまでに愛したまう事は思い掛け無き幸いなり。針眼衣の刀自の不正事は由ある事と聞こえれども、およそ非道を行う者が本意を遂げたる例は無し。さる業は止めたまえかし」と諭せば枸橘いよいよ恥て、「向後をきっと慎むべし」と誓いをたて、盃を改めて、大箱らをもてなすにぞ、幾兵衛と記太郎らはこの時厠へ赴いて、彼女らの物語りを聞かざれば、その故を知らねども、今又、三人の女どもが来つつ、大箱をもてなしたる同じ席に連なれば、思いのままに飲み食いしつつ、いと憎からず思いけり。

※寝た刃（根太刃）合わせ：刀身の表面は斬れ味を良くする 為にわざわざ荒らされた。

※方便（たつき）：①生活の手段。生計。②手がかり。手段。③（様子などを知る）見当。

〇かくて、その日も暮れしかば、大箱は心とも無く此の所に一夜さ泊まって、明けの朝、発ちいづ

るを琴樋らは名残りを惜しんで割無く宿所に誘いつつ、大方ならずもてなしければ、大箱は思わずも又、両三日押し止められて、第三日の真昼頃にようやく琴樋の宿所を出て、隅田川の方に赴く程に、浅草寺の門前に人数多立ち集いしを何事やらんと立ち寄り見れば、年の頃三十路ばかりの女が居合い刀を抜きひらめかし、人に見せつつ反魂丹と歯磨きを売るなりけり。その時その薬売りの女は居合い刀を使い果て、薬と歯磨きを持ちながら、手すりの辺を打ち巡り、▼

「私が事は御当地へ初めての商いなれば、お馴染み薄き旦那方、御存知なるは稀なるべけれど、反魂丹は正真の熊の胃入りなり。第一に下り腹、食傷、霍乱（日射病）※、寝冷え、癪、つかえに速効あり。又、歯磨きは紅入りにて、口熱を去り揺らぐ歯を据える。虎の爪の千垣の薬、歯磨きと御尋ねあれば隠れあるべうもはべらぬなり。居合いの型は十八番、またまた使って御覧に入れん。薬をこの間に求めたまえ。御用は無きか」と幾度と無く、うち巡りつつ喋れども、諸人一人も薬を買わず、千垣は再び声を振り立てて、

「只今も申せし如く、お馴染み薄き私なれども汗水流して使うたる居合いは商いの愛嬌なり。さまで御入用にあらずとも、一つ二つの薬を買って後を使わしたまえかし。かくても御用ははべらずや」と呼びかけ呼びかけうち巡れども、各々目と目を見合わすのみ、買わんと云う者無かりけり。

その時大箱思う様、

「この虎の爪の千垣とやらんは世の常なる武芸にあらず。彼女あくまでに大刀を使って薬を買う者絶えて無ければ、さこそ心に恥ずるらめ。栓術あり」と忙わしく懐をかかぐって、小判一両取り出して、これを千垣に与えつつ、

「思うにましたる御身の武芸、私はほとほと感心せり。此はささやかなる物ながら、居合いの花に参らせる。受け納め得たまえかし」と云えば千垣は驚きながら、小判を取ってうち頂き、

「かく数多の群衆の中に私を知る者無かりしに、世の常なる旅人とも見えたまわざるお女中が小判一片、惜しげも無くたまわるこそ、ありがたけれ。御名を聞かま欲けれ」と云うに大箱は微笑んで、なお物云わんとする程に、たちまち群集の内よりして年いと若き大女が腕まくりして現れ出て、

「此の島流しの腐り女め。俺の指図で買わせぬ薬を好きも好んで壱両と云う花を取らする事やはある。そこな退きそ」と息巻いて、早や大箱を引き捕らえ、握り拳をひらめかし打たんとするを引き外す。大箱は身を沈まして逃げんとせしを逃さじとて進む後ろに虎の爪千垣はすかさず走り掛かって、その大女の利き腕を取るより早く引き担ぎ、大地へだうと投げたりける。さればその大女は怒って大箱を打たんとせしに、思わず千垣に投げ飛ばされて、驚きつつ、ようやくに身を起こし、砂うち払って見返りながら声を振り立て、

「うぬ、よく俺を投げ付けたな。此の返報はきっと返すぞ。覚えていよ」と減らず口、擦り壊したる膝頭を撫でさすりつつ、足曳の山の宿の方へ立ち去りけり。

既にして此の騒ぎに群集の諸人は散り失せて、辺りに佇む者も無ければ、千垣は又、大箱にうち向かい、先にも申せし事ながら御身は首枷を掛けられたまえば、近き配所へ送られて赴きたまう道中ならんに、私を誉めて数多の金をたまわりしは世の常ならぬ女中とこそ思いはべれ。願うは名乗らせたまえかし」と云われて大箱微笑んで、

「私は難波の大箱なり。斯様斯様の事により此の度上総の九十九里浜へ流される者にはべり」と云うに千垣は驚き歎じて、

「しからばその名は世に隠れ無き難波の書役、春雨の大箱の刀自にましますか」と再び問えば頷いて、
「私すなわち春雨の大箱にこそはべるなれ」と告げるに千垣は身をひる返し、大箱を伏し拝み、
「人を救うに財を惜しまず、此上無き賢女にまします由は世の風聞に聞こえしかば、いと懐かしく思いたりしに、図らず見参に入りし事は一期の喜び、何事かこれに増すべき。私の親は鎌倉の将軍家に仕えまつりし下司にてはべりしかども、志ある▼者にして、且つ武芸は人に優れたり。しかるに頼朝卿が失わせさせたまいて、世が北条氏の手に落ちたるをひどく恨み憤り、禄を辞し身の暇をたまわって、陸奥の会津の里に縁を求め、浪人しつつ一期を送りぬ。私は女にはべれども父の太刀筋を見習って、いささかその技を得てしかば、商人百姓の妻にならまく欲せず、かく居合いを抜き、薬を売って、彼の地に年頃を経たりしが、此の浅草の観世音は鄙（いなか）にはあれど流行らせたまいて人の参る事絶え間なしと、かねて伝えて聞きはべれば、此の度俄かに思い起こして遙々と来にけれど、この地に知る人稀なれば、はほ客店（中国語の旅籠屋）にはべり」と云う。大箱聞きつつ頷いて、
「さては私の思いに違わず、武士の娘に御座せしな。いざたまえ、そこらにてなお物語りを聞かま欲し」と云うに千垣は一議に及ばず、居合いの道具を片付けて、辺りの茶店へ預け置き、遂に大箱に伴われて、並木ばらの辺の料理酒屋に赴いて、酒酌み交わしつ我が上を残る隈無く語らえば、大箱も又、我が上と義を結びたる勇婦らの事の元末を説き示して、
「御身はこの地にあらんより、上総へ尋ねて来たまえかし。私は漂泊人なれども人の恵みによって蓄えあり。いささか御身の助けとならん。必ず後より来たまえ」と云うに千垣は喜んで、その儀にぞ従いける。さてあるべきにあらざれば、大箱は幾兵衛、記太郎に急がされ、盃を納め酒肴の値を酒屋の小者に取らしつつ、隅田川の方に赴くにぞ、千垣も大箱に別れを告げて浅草寺の方へ急ぎけり。

※霍乱（かくらん）：夏に起こる、激しい下痢や嘔吐を伴う病気の古称。今日の急性腸炎・コレラ・赤痢などか。また、日射病・暑気あたりともいう。

〇既にその日も傾いて、七つ下がりになりしかば、大箱らは宿を借らんとて浅草の里の旅籠屋に立ち寄るに、何処の旅籠屋にても宿を貸さず、事の訳を尋ねるに、その者どもが皆云う様、
「御身は先に浅草寺の門前の居合い抜きに花を取らせ▼、あまつさえ一分銀の刀自を惨く投げさせたまいしかば、彼の刀自がひどく腹立てて、もし御身たちに宿を貸せば祟りを為さんと云われたり。彼女は名だたる女立てにて、ここらで歯のきく輩なり。さるを用いず宿を貸せば、分類☆眷属怒り立って、打ち壊されんは必定なり。他郷へ泊まりたまえかし」と答えて宿を貸す者無ければ、幾兵衛、記太郎は苛立って、
「しかりとも我々は私の旅人ならず。天野殿の仰せによって難波より遙々と流人を送り、上総に赴く公事であるものを誰にもあれ妨げせば後日に咎めを被らん。まずよくこの儀をわきまえて、今宵一夜さ泊めよ」と云えども承け引く者は無く、
「流人送りに御座するとも、我々は旅籠屋をのみを世渡りに為す者ならず。皆百姓で候えば、後の咎めはいざ知らず、今宵と云うて明日とも待たれぬ、その祟りをいかがわせん。決して叶い候わず」と里の家毎に皆否みて宿を貸す者無かりしかば、その日も既に暮れにけり。されば幾兵衛、記太郎は

大箱をひどく恨んで、
「御身が由無き業をせしより、恨みも無き里人らにさえ疎まれて、かかる難儀に及びたり。あな無益や」と呟けば大箱はしばしうち案じ、
「しかのみ云うては事果てず。よしや里人は宿を貸さずとも庄屋の宿所へ赴かば、違背すべくもあらずかし」と云うに幾兵衛、記太郎は「真にさなり」と答えして、庄屋の宿所を尋ねるに、大庄屋の宿所は山谷村にあり。ここよりなお五六町七八町もあらんと云う。そは便無しと思えども、さてあるべきにあらざれば不知案内なる夜の道を訪ね詫びつつ、辛くして山谷村に赴きつつ庄屋の宿所に音ないて、しかじかと云い入れけり。
　さればこの地の大庄屋は蟹部木工六と呼ばれて豊かなる百姓なり。年の齢は五十路余りで六十路にやなるべからん。家には奴婢が数多あり、鎌倉よりの下知により上総へ遣わす女流人の宿取りを遅れて難儀の由を聞き、更に一議に及ばず、やがて客座敷に迎え入れ、夜食をすすめ、湯浴みさせたるもてなしぶりはなおざりならず。事果てて木工六は幾兵衛らに対面して、その来歴を尋ね問い、さて云う様、
「武蔵の内の浅草、千束、山谷、広沢、金杉の五ヶ郷は院の御庄園で候えば、鎌倉の御下知に従わず。さるにより、ここらの里人らが公人にもはばからず、宿し候わぬにもや候わん。しかりとも、京鎌倉と分け隔てすべき事かわ。拙者は庄屋で候えば、異議なく御宿を仕りぬ。豊かに休らいたまいね」と懇ろに慰めて、出居の方へ退きけり。その隙に女共は手早く臥所を敷き設け、いざとてやがて案内をするに、大箱は手水に▼赴き雨戸引き開け月明かりに向かい、遙かに見渡せば、庭の向かいに畦道あり。隅田川の渡し場はこの所より遠からず、明日は未だきに彼の大河を渡し果てなんと思いつつ、やがて臥所に入りにけり。
　しばらくして外の方より人数多帰り来て、そのまま座敷へうち集えば、主人木工六が立ち出て、
「河堀、今宵は何事あって、いと遅く帰りしぞや」と問われて河堀は小膝を進め、
「然ればとよ、聞きたまえ。奥の会津より来ぬる女の居合い抜きめが、今日観音の門前へいでたり。全て斯様なる者どもが初めてこの地へ来る時はまず御身に由を告げ、又、我々にも付け届けして生業をすべき筈なるに彼奴はさる事をせず、おのがままに人を集えて銭儲けをせんとしつる。事の仕方が憎ければ、私は諸人にこの儀を告げて、彼女の薬も歯磨きも買わせざりけるに、島流しにやあらんずらん、首枷を掛けられたる旅の女めが金壱両の花を取らせて、私が鼻を挫いだり。よってその島流しめを打たんとしつつ、思わずも居合い抜きめに不意を打たれて、ひどく不覚を取りしかども私を助ける者が無ければ、心ならずも退いて、さてあちこちなる旅籠屋へしかじかと由を告げ、彼の島流しに宿を貸させず、かくて多勢を語らって居合い抜きの千垣めを引き捕らえて責めさいなみ、ぐるぐる巻きに縛めて、柴部屋に繋ぎ置いたり。かかればその島流しめが宿取りかねて、あちこちとさ迷う所を打って締めんと思いつつ尋ねしに、何地か行きけん未だ得会わず、姉御は何処にいたまうやらん。諸共に奴らを尋ねて、恨みを返さんと思うのみ」と云うを木工六は聞きながら、
「またしてもおぞましや。女に似気無き力技、人を損ねて済むべきか。姉はひどく酒にや酔いけん。宵より小座敷に臥して居り、彼女が又、聞けば共に怒って燃える薪に油を注がん。例えば人の志にて、居合い抜きの千垣とやらんに幾ばくの花を取らするとも、妬むべき事にはあらず。ことさら相手は鎌倉の執権の御下知などにて配所へ赴く女ならば、私の旅人ならず。しかるを打ちも叩けば、事の難儀にならんのみ。止みね、止みね」と留めるを娘は聞かずあざ笑い、

「都よりの御下知にてここらを過ぎる旅人ならば、後に祟りのありもせめ。鎌倉方より流される流人を打ちも殺すとも、後の祟りの▼あるべしやは。要無き事を宣うな」と勢い猛く説き破るを大箱は早く聞き付けて、そと起き出て垣間見れば、先に千垣が投げ飛ばしたる彼の大女に疑い無し。もし浮々としてここに居らば、必ず彼奴に殺されん。逃げるにしかずと思案をしつつ、由を幾兵衛らに囁けば、幾兵衛も記太郎も事の由を漏れ聞いて、驚き恐れる事大方ならず、「そも何処より、逃げ去らん」と云うに大箱は声を潜めて、
「この内庭より畦道を真直ぐ行けば隅田川の渡し場へ遠からず。さればとて戸を開けていでれば、彼に知られなん。壁を壊ちて、外の方へいづるに増す事あるべからず」と云うに幾兵衛、記太郎は「真にさなり」と頷きつつ、手早く各々身拵えして、旅包みを背に負って、密かに壁をくり抜いて、外の方に忍び出て隅田川を指して走りけり。

〇かくて大箱ら三人は隅田川の辺に赴いて、「渡し船やあるか」と尋ねるに、船一艘も無かりけり。かかる所に後辺より松明を振り照らしたる人数多が此方を指して間近く走り来にけるを大箱らは見返って、
「あれはまさしく庄屋の娘姉妹が人を集えて我々を追っかけ来るに疑い無し。此はいかにせん」とばかりに驚き慌てて、あちこちと皆隠れ家を求める折から、一群茂き葦の間より漕ぎ出す釣り船あり。大箱らはこれを見て、
「やよ船人よ、船貸したまえ。我々は賊に追われてようやく逃れ来る者なり。早く向こうへ渡されれば、船賃は望みに任せん。やよのうのう」と急がすにぞ、船人は「おう」と答えて、そのまま船を差し寄せるを「としや遅し」と大箱はひらりと船にうち乗れば、幾兵衛と記太郎は風呂敷包みをどさりと船へ投げ入れて、押し続きてぞ飛び乗りける。さればその船人はたくましげなる女なり。今、幾兵衛らが投げ入れた風呂敷包みが重やかにて、板子に当たって音せしを只じろじろ見返りながら竿取りつめて押し出せば、幾兵衛と記太郎は持ったる棒を取り伸べて、岸を一突き突く程に船はたちまち汀を離れて沖の方へぞいでにける。

〇さる程に彼の姉妹は大箱らを追っかけ来て、汀に佇み声高やかに、
「やよ、その船に乗せたるは我々の仇なるぞ。さぁ漕ぎ戻せ、戻さずば、後日にきっと恨みを返さん。そも我々を誰とか思う、山谷の末広、河堀なり。丸木船にはあらざるや」と諸声合わして呼び掛ければ、船漕ぐ女はあざ笑い、
「察しの如く俺様は向島の丸木船なり。所要あれば明日聞くべし。今宵は急ぐ由あって、何云われる様か聞き取れず。明日の事よ」と答えして、いよいよ船を漕ぐ程に間遥かになりにけり。

〇その時その船人は艫を引き上げて大箱らにうち向かい、
「客人たちは冷や麦か花巻蕎麦を召されるか。いずれなりとも望みに任せん。いずれをや召される」と云うに三人は笑いつつ、
「いかでかここにさる物あらん。そは戯れにこそあらん」と云わせもあえず、船漕ぐ女はからからとあざ笑い、
「否、我れが云う冷や麦と花巻蕎麦は食い物に非ず。▼身ぐるみ全て剥ぎ取って此の川水へ斬り沈

めるを冷や麦と名付けたり。又、簀巻きにして沈めるを花巻蕎麦と名付けたり。いずれなりとも望みに任せん。さぁさぁ云え」とほざきにほざいて隠し持ったる長刀をきらりと抜いて振り上げれば、「あなや」と驚く大箱と共に恐れる幾兵衛、記太郎。刀の束に手を掛けれども、胴震えしてなかなかに敵対うべくもあらざれば、「許したまえ」と叫ぶのみ。一人の賊婦に勢い取られて栓術は無かりける。これより後の物語りは五の巻に著わすべし。この巻書き入れ多かれば、画の間に尽くす事あたわず、この半丁の絵の訳も五の巻に至ってつぶさなり。

傾城水滸伝　第八編ノ三　曲亭馬琴著　歌川国安画

大箱再び声を掛け、
「やよ、船人、待ちたまえ。そなたが我らを害せんと欲するは金故ならん。路用は残らず参らせん。命は助けたまえかし」と云わせも果てず、荒女はからからとあざ笑い、
「無益の繰り言聞く暇は無し。思うに汝は大方ならぬ罪を犯して遠き島根に流される者なるべし。さらば今殺すとも自業自得と云わまくのみ。又、送りの宰領めは罪人を脅しはたって不義の財を貪らずば、いかでか数多の金を持たんや。彼もこれも非道の曲者、押し片付けるは天の冥罰。今更逃れる道は無し。観念せよ」と罵って、再び刃を振り上げる折から一艘の漁船に三人の女がうち乗りたるのが川下より漕ぎもて来つ。舳先に立ちたる一人の女が月明かりに透かし見て、「そは丸木船にあらずや」と声掛けると荒女は持つたる刃を取り直し、背の方へ押し隠し、
「さう云うは都鳥の刀自にこそ。夕虹、春霞諸共に船路を何処へ行くやらん」と問い返されて、
「然ればとよ。御身も予て伝え聞きけん、難波の賢女春雨の大箱殿が斯様斯様の事により、上総の方へ流されたまうと云う風聞あれば、出迎えて針目衣の枸橘の宿所にて対面し、その後私の家路に伴い、両三日ほど留めしかども、さて、あるべきにあらざれば送りも果てず別れたり。この故に鬱々と心さすがに楽しからねば、いささか憂さをやらん為に長縄なりともはかん☆とて、夕虹、春霞らを伴いつ、宵より川下を漁りしに絶えて獲物があらざれば、又、川上をはかんとて、思わずここらへ来つるなり。御身は又、人を乗せて船を沖中に止めしは故こそあらめ。いかにぞや」と問うを聞きつつ大箱はたちまちに声を掛け、
「やよ、都鳥の刀自、救いたまえ。我が厄難を救いたまえ」と叫ぶに驚くあなたの三人は船を間近く▼漕ぎ付けて、見れば大箱なりければ、「此はそもいかに」とばかりに琴樋は一早く彼方の船に乗り移る、この事の体たらくに荒女は驚きながら手早く刃を鞘に納めて、
「何、この女中は予て聞く、難波の書役春雨の大箱の刀自にましますか」と問えば琴樋は頷いて、
「云われる如く、この刀自こそ、大箱殿にましますなれ」と告げるに恥たる荒女は身をひるがえし額突いて大箱を伏し拝み、
「知らぬ事とは云いながら、路用の金に心迷って害し奉らんとせしこそ悔しけれ。許させたまえ」とうち詫びれば琴樋も又、驚いて、
「さては丸木舟の出来心にて刀自を損なわんとしつるにこそ。私がもし来る事がしばしなりとも遅かりせば、後悔ここに立つべからず。真に危うい事なりき」と云うに喜ぶ日熊、龍間も大箱に対

面しつつ、喜びを述べ慰めて、つつが無きをぞ祝しける。
　その時大箱は琴樋を見返って、
「この勇婦人も並々の漁りする者とは見えず。その名を聞かま欲しけれ」と云うに琴樋心ざ☆をすすめて、
「察しの如くこの荒女は名を横鯛と呼ばれたるが、力強くて武芸あり。事に水練が達者なれば、世の人あだ名して丸木舟の横鯛と呼びなしたり。叔父の某は上総之介広常主の家の子（家臣）なりしが頼朝卿の御時に広常は人の讒言により儚く討たれたまいしかば、その子は隅田川の辺に世を避けて漁をして世を渡りつつ、先つ頃に世を去りにき。家を継ぐべき男子無く、わずかに娘姉妹あり。この横鯛は長女にて下貝と云う妹あり」と告げるに横鯛は頭をもたげて大箱にうち向かい、
「私の妹下貝は水練の妙を得て、水を潜る事は鳰（カイツブリ）にもましたり。よって世の人あだ名して零丁鳥の下貝と呼びなしたり。初め私と諸共に向島に在りし時、渡し守を生業として薄けき煙りをたてたるが、好める酒を飲むに足らねば姉妹密かに示し合わしつ、渡し賃を安くして沖中へ乗り出し、たちまちに船を止め、諸人にうち向かい、船賃を安くして乗せ参らせたりけれども俄かに風が悪くなり、容易く向かいへ着け難し。各々銭を出し合って、三貫文の酒手をたまわれ。さなくては船を下りて、漕ぎ着くる事叶い難しと脅しつ賺しつねだる折、妹下貝も又、道行く人にいでたちて其の船に乗って居り、たちまち怒れる面持ちして、「憎き渡し守の女めの目論見かな。数丁に足らぬこの川を渡すに三貫文の賃をねだるは盗人に異ならず。そこな退きそ」と罵って、私に討ってかかる所を引き外しかい掴み、川へざんぶと投げ入れれば、下貝は水を潜って川下より陸へ上がるを知る者絶えてあらざれば、此の勢いに驚き恐れた諸人は三貫の銭を集めて渡すになん。姉妹はこれを分かち取り、▼あくまでに酒を飲みにき。しかれ共これらの業は最も非道の世渡りなれば、ようやくに後悔して、私は漁をもて生業とする程に妹下貝は縁について、上総の九十九里浜に赴きつつ魚問屋の妻となりしが、夫は先に世を去りつ、今は後家持ちにてはべるかし。しかるに今宵図らずも御身三人を乗せ参らせしに、投げ入れられたる旅包みが板子に当たって音せしはこれ金ならんと推せしより、一人は罪人なり、送りの二人は民を虐げる者どもなれば、害してこれらが路用を取るとも善人を損なうにならねば罪にはならじと身勝手に良からぬ心を起こせしは真に一時の迷いにて口惜しくも恥ずかしくも云い説く言葉ははべらずかし。例え千金万金の財の山に入るとも、欲に迷って道ならざる行いはすべからず。願うは今より都鳥、夕虹姉妹に異ならず、思し召しくだされよ」と誓いを立てて詫びるにぞ、大箱は聞きつつ喜んで、
「誤って改めるをはばかる事なかれとは聖の教えにはべるめり。悪を去って善に返らば、これに増したる幸い無し。何をか恨みはべらんや」と云うに横鯛も喜んで、
「御身が上総へ赴きたまえば、妹下貝に由を告げ、御身の事を云いやるべし。なれども私は手を書きはべらず、都鳥の刀自に代筆を頼まばやと思えども船には硯も紙筆も無し。元の岸辺に着けはべらん」と云うに琴樋、日熊姉妹は「しかるべし」と答えして、竿取り上げる二艘の船を元の岸にぞ漕ぎ戻す。
　されば幾兵衛、記太郎らはようやく生きたる心地しつ、おめおめとして従いける。その時大箱は浅草寺の門前にて千垣に花を取らせしより、山谷村の庄屋木工六の娘に恨みを受けし事、又、その宿所へ泊まり合わして、災いそこに起こらんとしつるに驚き逃れいでたる事の元末を物語れば、琴樋、横鯛らは聞きながら、

「その姉妹は勇婦なり。姉を天地金末広と呼びなし。妹を一分金河堀と呼びなしたり。浅草より北の方はその姉妹を女立ての頭とす。又、浅草より西の方は琴樋を頭とす。又、隅田川より東の方は横鯛を頭とすなり。全てこの三組の勇婦は▼艱難苦楽を共にして、義を結びたる者にはべり」と云う隙に船は着きにけり。この時末広、河堀らは数多の男共を従えつつ、なおも汀に佇んで横鯛を恨み罵り、長詮議してありけるを琴樋、横鯛が遙かに見て、

「あの松明は末広らがなお退かで居るにこそ。いざや春雨の刀自を引き会わせん」と云うを大箱押し止めて、

「そは思いも掛けぬ事なり。彼の姉妹はいとひどく私を憎む者なるに、会えば微塵にせられなん」と云うに横鯛は笑いつつ、

「その儀は心安かるべし。彼の姉妹は初めより御身の素性を知らざる故に仇せんとこそ謀りけめ。告げ知らせれば先非を悔いて従わん事疑い無し。うち任したまえかし」と云いつつ両人走り行って、末広、河堀らを呼び掛けつつ、大箱の事の元末を斯様斯様と告げ知らせれば、姉妹の勇婦は聞きながら、且つ驚き且つ後悔して鉾を伏せ棒を投げ捨て、

「我々眼ありながら、さる大賢女を見知らねば恨むまじき事を恨んで仇せんとしつるこそ、返す返すも落ち度なれ。願うは刀自たち姉妹の為に詫びしてたまえかし」と又、他事も無く頼みにけり。されば琴樋、横鯛は末広、河堀を誘い来つつ、大箱に由を告げて引き合わせれば、末広は河堀と諸共に額を突き、地上に伏して言葉ひとしく身の過ちを詫びて真心を明かせしかば、大箱は忙わしく姉妹を助け起こして、

「いささか事の間違いより、思わず恨みを結ばれしに、かく打ち解けて聞こえたまうは千金に増す喜びなれとて、物置に縛め置かれし千垣を許したまえかし」と云うに姉妹は一議に及ばず、

「そは宣うまでもあらず。千垣は我々が身に引き受けて、よろしく扶持致すべし。まず早宿所へ寄らせたまえ」と割無くすすめて誘いつつ、琴樋、横鯛、日熊、龍間の姉妹をも山谷村へ伴わんとて、下部二人を残し留めて二艘の船をうち守らせ、皆々ひとしく連れ立って山谷村へ赴く程に、夜はほのぼのと明けにけり。

〇かくて末広、河堀は大箱の事の由を父木工六に告げ知らせ、客座敷に酒宴を設け、虎の爪千垣にも和睦の由を説き示し、同じ席にはべらせつつ、琴樋、横鯛、日熊、龍間と諸共に大箱をもてなすにぞ、木工六も喜んで饗応に手を尽くしけり。かくてその日も暮れしかば、大箱は幾兵衛、記太郎らと共に留められて、心ならずもその夜を明かしつ明けの朝は未だきより立ち去らんとしてけるを末広、河堀は名残りを惜しんで、又、両三日留めつつ日毎日毎に酒宴を設けてもてなし大方ならざれども、さてあるべきにあらざれば、大箱はしばしば否みて第三日目に発足す。その時末広、河堀は大箱に金五十両を贈って餞とし、幾兵衛、記太郎には五両づつ遣わして、大箱の上を頼みけり。▼此の両人は道中にてしばしば危うい目に合いしかど、果ては皆幸いありて、金数多もらい得たりしかば、深く心に喜んで、いよいよ大箱をいたわりけり。

さる程に大箱は人々に別れを告げ、千垣には遠からず上総へ訪ね来るべき由を聞こえ知らして、隅田川の方辺へ出行く程に、琴樋は事の由を枸橘にも告げ知らして、末広、河堀、日熊、龍間と諸共に橋場に至ってこれを送れば、末広姉妹は念ごろに大箱を慰めて、

「千垣の事は我々の宿所に留め、しばらくは生業をいたさせて、後に上総へ遣わすべし。御心安く思いたまえ」と云うに大箱喜んで、人々に暇乞いして、幾兵衛、記太郎諸共に横鯛の船にうち乗れば、横鯛は櫓を押し立てて向かいの岸に渡しつつ、己が宿所へ伴って大箱に酒をすすめ飯をすすめて厚くもてなし、琴樋に書かせ置きたる一通の文を取り出し、大箱に指し示し、
「御身が上総へ至りたまえば、妹下貝の宿所を尋ねて、これを届けたまわれかし。九十九里浜の辺とばかり伝え聞いてはべれども、所の名は定かならず。なれども魚問屋と尋ねたまえば相違あるべうもあらずかし」と云うに大箱は心得て、その文を受け取りつつ上総を指して発ちいづれば、横鯛は逆井の辺まで送り行って遂に袂を分かちけり。

〇かくて大箱は日に歩み夜に宿り、行き行って上総の国司の城に着きしかば、幾兵衛、記太郎らは大箱を伴って城中に進み入り、すなわち事の趣を国司の重臣人らに訴えて天野の判官の寄せたりける送り状をぞ渡しける。この時当国の守護たる者は亀菊の従兄弟にて、上総の新司久影と呼ばれたり。上総は院の御領なれば、国司を都より付けられて、市原の郡の飯山の館にあり。されば院の御寵愛の亀菊の親族なれば、国人は恐れ敬う程に勢い世の常なる国司にもいやましたり。さる程に新司久影は天野の判官の送り状を見て、公文所の局の内に幾兵衛、記太郎と共に大箱を呼び集え、自ら罪の趣を尋ね問い、大箱の首枷を検めさせ、その封印が千切れたるをいぶかって問い正すに、幾兵衛、記太郎は言葉を揃えて、「長き旅路に候えば、雨風に損なわれて、かたの如くに候」と云うに久影は深くもなじらず、流人預かりを承る秋高鍵介、卸田錠八と呼ばれる小役人に大箱を受け取らせ、首枷を解き許させ、すなわち天野の判官へ答え文を書きしたためて幾兵衛らに渡させしかば、幾兵衛、記太郎は退いてやがて難波へ帰りけり。
　かくて大箱は下部両人に送られて、流人小屋に赴きければ、女流人らは打ち集い、
「御身は初めて流され来れば、心付き無き事あらん。流人預かりの鍵介殿と錠八殿に早くしかじかと頼みたまえかし。しかれども彼の人々は男流人の預かりなれば、さまで勢いある者ならず、女流人の預かりは夏女の刀自と呼ばれたまう。此は当国の女武者にて武芸に優れし女中ぞよ。これには取り分け縁を求め、贈り物をしたまえ」と心付ければ、大箱は一議に及ばず受け引いて、すなわち鍵介、錠八に方の如く計らいしかば、両人喜び談合して、大箱を流人小屋の帳付け役に取り立てて、小部屋を渡して彼女一人を懇ろにいたわるにぞ、流人どもは皆羨んで、「ことわざに云う地獄の沙汰も予ねてより聞くに違わぬものなり」と云わぬ者なん無かりける。
　かくてその次の日に鍵介、錠八が連れ立ち来て、大箱に囁く様、
「女流人の預かりは女武者の夏女なり。そなたは▼未だ彼の婦人に心付けをせずと聞きぬ。もしその怒りに逢う時は殺威棒にて必ず打たれん。さぁさぁこの儀を計らいたまえ」と云うに大箱微笑んで、
「否、彼の夏女の刀自ならば心使いに及ばずはべり。うち捨てて置きたまいね」と否むを両人聞きながら、
「それはそなたの了見違い。彼の刀自に憎まれれば、うち殺されんも計り難し。片意地なる事を云う者か」と言葉ひとしく諭す折から、一人の下部が走り来て、
「今参りの女流人は汝なるか。夏女様が呼ばせたまうに、さぁさぁ来よ」と引き立てて、彼女の宿所へ連れて行く。今この事の体たらくに鍵介、錠八は云えば更なり、流人ども皆嘆息して、「無惨や、

由無き我慢を張って、あの大箱はうち殺されん。おぞましさよ」とぞ呟きける。

〇さる程に大箱はその下部に急がされて夏女の宿所へ赴く程に、夏女は数多の獄卒を左右に従え、床几にかかりて、今か今かと待ちて居り。既にして大箱は辺近く引き据えられて、ちっとも臆せずつい居たるを夏女はきっと睨まえて、

「汝はこの地へ流され来ながら、我を敬う心無く、呼ばれてようやくここへ来ぬる。そのしぶとさは知られたり。初めて来ぬる流人には殺威棒の掟あり。只今背を一百打たせん。覚悟をせよ」と息巻けども大箱騒ぐ気色も無く、

「そなたは私が贈り物を贈らぬ故に腹立てて罵るにこそあらんずらん。あだし人には贈るとも、そなたには贈り難し。よしやまげて贈るとも、そなたはそれを受け難き訳があり。由は後に知られん。漫ろなる事を宣うな」と云うに驚く獄卒らは

「我々がここに居るならば、夏女の刀自は怒りに絶えず、あの大箱を打てと云われん。彼の女には我々も物を恵まれし事さえあるに、ひどく打たれんは便無き業なり。外すにしかじと思案をしつつ、云い合わさねども一人立ち二人立ってぞたちまちに辺りに居らずなりにける。夏女はこれに心も付かず、大箱を打たせんとて辺りをきっと見巡らすに、獄卒一人も居らざれば止む事を得ず、鞭を取って自ら打たんと進めども、大箱はいよいよ騒がず、

「そなたは漫ろに権威に募って、私を討たんとしつるとも、私が罪はなお軽し。江鎮泊の軍師呉竹と密かに交わりを結ぶ者こそ、此上無き罪人なるべけれ」と云うに夏女は驚いて、思わず鞭をからりと投げ捨て、

「そなたはそれを誰にか聞いたる。密かに告げよ。いかにぞや」と問えば大箱は微笑んで、

私は彼の呉竹と交わる者の事を云うのみ。そなたに問われる事かは」と云うに夏女はいよいよ慌てて、

「しかのみ云うては事果てず。定めて聞いたる事あらん。密かに告げよ。いかにぞや」と又、他事も無く尋ねれば、大箱は左右を見返り、

「辺りに人が居らずとも、ここは閑談に便り良からず。いざ外の方へいでたまえ。かけ離れたる所にて心の機密を告げはべらん」と云うに夏女は頷いて、大箱と諸共に浦曲の方へ立ちいでつつ、染馴屋と云う仕出し酒屋の二階にひとしく打ち上り。小者を呼んでしかじかと酒肴を云いつくれば、小者は心得、時を移さず酒を温め肴を持て来て、夏女と大箱にすすめけり。

　既にして盃も再び三度巡るものから夏女は未だ落ち着かず、大箱にうち向かい先の密事を催促す。その時大箱は懐より呉竹の文を取り出して、

「韋駄天の刀自。この文を見たまえば事の心も知られるべし」と云いつつ渡す一封を夏女は受け取り封押し切って、始めより終わりまで読み果てて、且つ驚き且つ喜ぶ事大方ならず、慌ただしく席を避け、額を突き拝して、さて云う様、

「おぞましや、夢にだも御身を春雨の刀自と知る由無ければ、只世の常なる女流人と思いなしつつ罵って、ひどく無礼をしはべりぬ。許したまえ」とうち詫びれば、大箱は忙わしく夏女の手を取り助け起こして、元の席に着かせて云う様、

「私も又、この事を始めより御身に早う告げまく欲しう思いしかども、辺りに人の居らぬ折に▼見ゆる事が容易からねば、心ならずも黙止たり。それのみならず、ちとばかり御身を試みはべらんと

て、無礼なる事を云いはべりき。さて江鎮泊の体たらくは斯様斯様と小蝶、呉竹、 著 、桜戸、味鴨らの勇婦二十一人、三世姫を守護したてまつる事の 趣 。又、その身は止む事を得ず、義太吉を害して身を逃れたる始めより、先に故郷へ立ち帰り、天野家の捕り手の頭人に捕らわれたる事の元末、又、節柴の折瀧の事、竹世、花的の事、すべて義を結びたる勇婦の事、琴樋、横鯛らの上をさえ、始めを云えばしかじかなり、終わりは斯様斯様なりとて事つまびらかに囁き示せば、夏女は耳を傾けて、感嘆すること大方ならず、

「私は都に在りし頃、呉竹の刀自と交わって姉妹の思いを為せしが、私は当国の守久影主に付けられて此の所へ移り住み、呉竹の刀自は三世姫に従いまつりて賤の 砦 に籠もりしより、京鎌倉の怨敵なれば、訪れ久しく絶えたりしに、御身今この玉章（手紙）をもたらしたまうは千金なり。例え彼の刀自の頼みがあらずとも、御身は天の下に隠れ無き大賢女にましますに、時の不詳にかかつらいて、この地に流されたまいしものをいかでかつれ無くものせんや。今より私が身に引き請けて、ともかくもしはべりてん。御心安く思いたまえ」と云い慰めつつ、更に又、 肴 を添え銚子を替えて、いと懇ろにもてなす折から、表の方が騒がしく挑み 罵 る声するにぞ、夏女はいぶかり小者を呼んでその由を尋ねれば、小者は答えて、

「然ればとよ。力寿殿が来たまいて銭を借らんと 宣 いしを主人が否みて貸さざりければ、たちまちに怒りを起こして 罵 り狂われ候」と云うを夏女は聞きながら、

「またしても旋風めが、不正事をするにこそ」と云いつつ、大箱にうち向かって、

「しばし無礼を許したまえ。彼奴を 鎮 めはべらん」とて、忙わしく身を起こしつつ小者を先へ押し立てて、下屋へ走り下りにけり。しばらくして夏女はその力寿を伴い来て、大箱にうち向かい、

「この女は力寿と呼ばれて私の妹分にはべるなり。故郷は丹波（京都北部）の者なるが、力あくまで猛くして二つの斧を使いはべり。見られる如く色黒くして肥え脂満ちたる面 魂 がふてぶてしいのみならず、酒を好んでややもすれば、人と物争いをする癖あり。愚直にして気短く、物に堪えぬ性なれば、世の人彼女をあだ名して旋風の力寿と呼びなしたり。始め故郷に在りし時、一旦の怒りに任して領主の家の子（家臣）を打ち倒し、半死半生にしたる咎により当国へ流されたり。その後、赦免ありしかど、その折は路用もあらず、かかる様にておめおめと故郷へ帰らんは要無しとて、なおこの浦曲に在るにより女流人預かりの小使いに取り立てて、私の宿所に居らせはべり」と云いつつ力寿を見返って、

「そなたはなどて▼無礼なる。此の刀自はそなたにも日頃より噂をしたる難波の書役と隠れ無き大箱の刀自に御座するなれ」と云えば力寿は大箱をつくづくとうち守り、

「さてはこの女中が彼の薄墨の大箱殿か」と云うを夏女は押し止めて、

「あなおぞましの粗忽者。その薄墨を云う事か」と止めれば力寿は笑いつつ、

「ハテ、無き事を云うにははべらず。仁義あって財を惜しまず、人を救いたまうにより、春雨の刀自とも呼ばれ、又、その色浅黒ければ薄墨の大箱とも世の人の云うにあらずや」と云うを夏女は止めかねて、「又しても又しても、その細注（注釈）※が入る事かは」と云えば大箱も微笑んで、

「やよ、力寿殿。云われる如く私は薄墨の大箱なり。夏女の刀自の妹分ならば私の為にも妹に等し。御身は又、何等の故に下屋を騒がしたまいしぞ」と問われて力寿は小膝を進め、

「然ればとよ、その事なれ。私は先に大判の銀五枚を持ちたるをある人に質として細金を借りて使いはべり。かかれば彼の銀を受け戻し、思いのままに両替えしつつ使わんと思うにより、ここの主人

に金三両を借りんとて来はべりしに、主人がつれ無く貸さざりければ、つい声高になりはべり。日頃私がここへ来て、飲みたる酒は多かるに、得意甲斐無く、ちとばかりの金を貸さざる主人の貪欲は許すべきものならねども、夏女の刀自に叱られて、云いも得はべらず止みはべり」と告げるに大箱は微笑んで、

「そはいとお易き事なりかし。これもて行って、その銀を受け戻したまいね」と云いつつ懐の紙入れより小判三両を取り出して、紙に包んで渡しつつ又、盃をすすめるにぞ、力寿は喜び引き請けて、五六碗の酒を傾け、暇乞いしつ、忙わしげに外の方指して出て行きけり。

※細注（さいちゅう）：①細字の注釈。細字注。②こまかに説いた注釈。詳注。

夏女はこれを見送って、心の内には喜ばず、大箱に向かって云う様、

「力寿は酒を貪る故に何時とても銭は無し。彼女いかにして五枚と云う銀あって質に入れんや。彼女が今しかじかと云いつる由は空言なり。さるを刀自は真として数多の金を貸したまいしかば、彼女又、酒を飲み賭けに耽って、たちまちに失うべし。要無き業をしたまいけり」と託言がましく呟くを大箱聞いて微笑んで、

「力寿は粗忽の者なれども、私は返って彼女の愚直を愛して不憫に思いはべり。貸したる金を失えば幾度も遣わすべし。惜しむに足らぬ事にこそ」と云うに夏女は感服して、又、云う由も無かりけり。

この時日はなお高かりければ、夏女は大箱を誘ってそこらを一遍うち巡り、酔いを醒まして、又、更に飲むべしと云うにより、大箱は此の儀に従い、両人ひとしく染馴屋を出て、巷の方へ赴きけり。

〇さる程に力寿は思いがけも無く大箱に三両の金を恵まれて、退きつつ腹の内に思う様、

「・・・・彼の女中は友を愛して財を惜しまずと云う由を予て伝え聞たるが、実に空言にはあらざりけり。かかれば我も目覚ましき酒宴を設けて、彼の刀自を▼もてなさずばあるべからず。しかりとて、この金を使っては返すに由無し。いかにせまし」と思案をしつつ、ようやくに思い付く由あって、かどり屋と呼ばれたる商人の宿所に赴きけり。

〇ここに又、かどり屋阿五右衛門と云う商人あり。鹿島の神を信仰しければ、先に太々講（鹿島講）※を取り立てて講中二十余人あり。月毎に銀五匁づつの掛け銀を持ち寄るを講中の各々が月番を立ててその金を預かりけり。かくてこの月のこの日は阿五右衛門が金預かりの月番なれば、講中の男女がかどり屋へうち集い、掛け銀五匁を差し出して茶を飲み菓子をうち食って、皆語らって居たりける。力寿はこの事を知りてければ、やがてかどり屋に赴いて、阿五右衛門らに云う様、

「私も鹿島信仰なれば、今より講中に入らんとて来るなり。掛け銀はいかばかりぞ」と問えば阿五右衛門らは皆答えて、

「掛け銀は月々に五匁づつに候えども、早月頃を経たるにより人毎に掛け銀積もって、百二十匁になりにたり。御身もこの講に入らんとならば、まず早その金を出して来月よりは五匁づつの掛け銀をもたらしたまえ。さなくてはこれまでの掛け銀の高に合わず、不同あっては入れ難し」と云うを力寿は聞きながら小判二片投げ出して、

「しからば只今云われる如く、是までの掛け銀はすなわち残らず渡すなり。ついて私に望みあり。当月の金預かりの月番は私がせん。既に此の月頃の掛け銀をいだせし上は各々違背あるべからず。この儀を心得たまえかし」と云いつつ財布に手を掛ければ、人皆呆れて押し止め、

「此は理不尽なる業をしたまうな。金預かりの月番は初めより定めあり。例え此の講に入りたまうとも今年は御身の番にあらず。まいて御身を入れんとも入れじとも、まだ返答もせぬ内にこの講金に手をかけるのは傍若無人と云うべきのみ。そこ退きたまえ」とかいやれば、力寿はたちまちひどく怒って耳を貫く声を振り立て、

「和主ら、私を疑うか。かばかりの金を預かって、残らず使い込みたりとても、来月次へ送る時に償えば事は済むべし。まげて私に預けよ」とわめけど聞かぬ一座の講中、

「力寿の刀自は酒を貪り、賭けさえ好む癖あるに、いかにしてこの金を預けん。例え弐両の金をいだすとも、この講中には入れ難し。さぁさぁ出て行きたまえ」と▼諸声高く騒ぎ立て、押し出さんとしてければ、力寿はいよいよ怒り狂って、近づく者をかい掴み、礫に取って投げ退け投げ退け、鬼子母神が荒れたる如く縦横無碍に打って回れば、傷を被る者も少なからず、皆々ひとしく恐れ迷って外の方指して逃げ出れば、力寿はその寄り金を皆懐へ押し入れて、行くをやらじと支える里人を追いつ返しつ騒ぐ折から、大箱は夏女と共に図らずここに来かかって、力寿が里人と挑み争う体たらくを見て、ひどく驚き、両人ひとしく声を掛け、

「力寿、そは何事ぞ。鎮まれヤツ」と呼び止めれば、力寿はその二人を見て、ついで悪しと思いけん、いささか恥たる面持ちにてたちまちに鎮まりけり。その時、阿五右衛門は里の男女諸共に夏女、大箱の辺に来て、力寿の狼藉の体たらく、斯様斯様と告げるにぞ、夏女は力寿を呼び付けて、ひどく叱って掠めたる彼の講金を返させしかば、阿五右衛門は力寿がいだせし二両の金を取り出して返さんとしつれども、大箱はこれを取らせず。手負いし者の膏薬代にその二両を使わしければ、阿五右衛門らは異議も無く皆喜んで退きけり。

※太々講（たいたいこう）：室町時代以後、無尽のような仕組みで、交代で伊勢参りをして太太神楽(だいだいかぐら)を奉納する費用を積み立てた組合。江戸時代に盛行。伊勢講。太太講。

〇かくて夏女は力寿に向かって事の元を問い正すに、力寿は包む事を得ず、

「大箱の刀自が貸したる金を饗応の料にする時はその金を返すに由無く、よって鹿島講に飛び入りして、寄り金を預かれば当分繰り回わしに宜しからんと思いにければ、かたの如く計らいてはべりしに、我が目論見は成らずして、返って刀自に二両の金を失わせしこそ、面目無けれ」と云うに夏女も大箱もひとしくいたく笑いつつ、

「宿小屋も無く酒を好んで賭けを嗜める荒女に誰が講金を預けるべき。真に沙汰の限りなり。不正業はきと慎んで染馴屋へ来て酒を飲め。さぁさぁ来よ」と引き立てて、元の酒屋へ伴いけり。

〇その時夏女は小者を呼んで、

「当所は鯛が名物なるに、などて鯛をば使わぬぞ」と問うに酒注ぎの小者は答えて、

「鯛船は十艘余りも浜辺に掛かりて候えども、▼問屋の主人が未だ来ぬとて、一つも売り候わず。全て此の浜のでは鯛船は問屋の主人がその相場を定めて後に商売を始め候なり。故に昼過ぎにならざれば、我々が手に入れ難し」と云うを力寿は聞きながら、

「そは不自由なる事ぞかし。私が浜辺に赴いて、一つ二つは買いもて来ん」と云いつつ、やがて身を起こすを夏女は急に押し止めて、
「この仕出し屋すら買い得ぬ鯛をそなたが行くともいかでか売るべき。止みね止みね」と制するを力寿は聞かずあざ笑い、
「誰にも売るべき鯛ならば、私が行かでも事は済むべし。売らぬを買うが真の買うなり。しばらくここに待ちたまいね」と云いつつ二階を走り下り、浜辺を指して急ぎけり。

〇かくて力寿は浜に至って、あちこちと見回すに、鯛船が数多かかりて居り、問屋の来るを待つにやあらん。船に昼寝をするもあり、網をすく者などあって、未だ商いを始めざりしを力寿は高く声掛けて、
「その船どもに大きなる鯛あれば私に売れ。値は望みに任せんず」と云うを漁師ら聞きながら、
「未だ問屋の主人が来ねば商いを始めぬなり。程経て後に来たまえかし」と否むを力寿は又、呼び掛けて、
「例え問屋が来ずもあれ、私は只今入用あり。まげて一弐枚売れかし」としばしば云えども、漁師ら頭を振るのみで答えをせず、空うそぶいてあざ笑えば力寿は腹に据えかねて、
「売らずば売らずもあるべきに、返答もせずあざ笑うは私を女と侮るならん。その儀ならば思い知らせん。後悔すな」と罵って、船にひらりと飛び乗れば、「此は狼藉や」と漁師ども、これかれ等しく騒ぎ立ち、櫓楫を持って打たんとするを力寿はあちこち引き外し、手早く楫を奪い取り、力に任せてうち倒せば、皆々ひとしく辟易して船より浜へ逃げ上り、只がやがやとわめきけり。

傾城水滸伝　第八編ノ四　曲亭馬琴著　歌川国安画

　その時力寿はあちこちと船どもをかかぐって、鯛を取り出さんとしつれども、全て釣り得し生き鯛は船底に生け簀があって、上より見ては無きが如し。力寿はこれを知らざりければ、尋ね詫びつつ苛立って、楫おっ取って磯端へ戻るを取り巻く漁師どもは「それ逃がすな」と群だって、打たんとするを物ともせざりし、力寿の勢いは荒れたる虎が羊を狩るに異ならず。追い回し打ち散らして、逃げるをなおも追いかけたり。かかる所に三十路余りなる一人の女が巷の方より来にけるを漁師どもが早く見て、「あれ、魚問屋のおえ様が」と云うに一人が走り行って、力寿の狼藉の体たらくを斯様斯様と告げるになん。その女はひどく怒って、
「その曲者を逃がしなせそ」と云いつつ裳裾を引き上げて、早向かいより走り来る力寿に向かって声を振り立て、
「この盗人めが不敵さよ。逃げるとて何処へも逃がさんや」と息巻きながら捕らえんと進むを力寿はきっと見て持ったる楫を取り直し、真っ向望んではたと打つを女は早く引き外せば力寿は思わず大地を打って楫は三段に折れてけり。さばれ力寿はちっとも騒がず、すかさず問屋の女主人の利き手を取って引き寄せるのを彼方も怯まず足をとばして脾腹を蹴んとしてけるを力寿は早く拳を固めて右の肩先はたと打つ。打たれて女はアツと叫んで倒れんとしながらも踏みこたえ、ようやくに振

り放って行方も知れず逃げ失せけり。▼

　此の事の勢いに漁師どもさえ皆逃げ失せて、辺りに人が無かりしかば、力寿はからからと笑いつつ、波打ち際を悠々と染馴屋指して行く程に、彼の魚問屋の女主人はててら（襦袢）一つの出で立ちして、ひらりと船にうち乗って、汀を後より追っかけ来て、たちまちに声振り立てて、

「黒ん坊の飯炊き女め。先には我が身は先を取られて、思わず汝に打たれしかども、此の度は決して許すまじけれ。さぁさぁ勝負を決せよ」と呼ぶを見返り立ち止まる力寿はかかとあざ笑い、

「性懲りも無き弱虫めが、口惜しくば早くここへ来よ」と云えば此方もあざ笑い、

「炬燵弁慶（内弁慶）、門の犬。さまでに船が恐ろしければ重ねて浜へ足踏み込むな。覚えていよ」と持ったる竿を取り伸ばし、うち掛けて力寿の足を突きしかば、向こう脛の皮を突き破り、いささか血潮滲んだり。

　これにぞ力寿はひどく怒って、

「この衒妻めが、ほでてんごう（悪ふざけ）※。そこな退きそ」と息巻いて、船へひらりと飛び乗ったり。問屋の後家はあくまでに、かくは力寿を怒らして船に乗らせんと謀りしに、力寿はこらえぬ性なれば、遂に謀り事に乗せられて漫ろに陸を離れしかば、魚屋の後家は密かに喜び、

「やおれ、旋風の悪たれめ。先に陸の戦いなれば不覚を取りしが、返報に水喰らわせん」と云いも終らず踊り上がって船端を力に任して踏む程に、船はたちまち覆り、船底上になりしかば、力寿は更なり魚問屋の後家も水底へ沈むものから、類い稀なる水練の達者なれば物ともせず、矢庭に力寿を引き捕らえ、組みつほぐれつ挑み合う。力寿も水を泳ぐ事は人並みに得たる者なれども、水中の働きは叶うべくもあらざりけり。一人は肌へ墨の如く黒く、一人は肌へ雪に似て白し。両人水中にあって浮きつ沈みつ争う程に、白き女は黒き力寿を押し沈めては水を飲ませ、又、引き上げては息をつかする。手練に驚く浦人らは全て汀に佇んで、

「あな無惨や。黒き女は謀り事に乗せられて、漫ろに船に乗りしかば、たちまち水に溺らされて、▼しばしば水を飲みにけん。既に早弱りたり。遂には息も絶えぬべし。あな不憫や」とばかりに瞬きもせず見守りたり。さる程に大箱、夏女の両人は力寿を待てども帰り来ざれば、

「彼女又、鯛を買い得ずして物争いをするにやあらん。行かずば由を知る由無からん。事の様子を見ばや」とて両人ひとしく染馴屋を出て浜辺に赴く程に、果たして力寿は一人の女と水中に在り、挑み戦うその事の体たらく。既に負け色に見えしかば大箱、夏女は驚いて、事の起こりと力寿の相手の名所を尋ねるに、浦人らはしかじかと始め終わりを告げ知らせ、「色の白き一人の女は魚問屋の女主人下貝と云う者なり」と告げるに両人は頷いて、

「さては横鯛の妹の零丁鳥の下貝なり。彼女は水練に妙を得て水鳥に異ならねば、零丁鳥とあだ名せられし手練は空言ならざりけり。あのまま置かば力寿は死なん。さぁ止めばや」と談合しつつ、夏女は汀に声振り立てて、

「なう、下貝の刀自に物云わん。御身の姉御前の横鯛殿より、寄せられし文をもたらせし大箱の刀自ここに在り。かく云う者は夏女なり。まげて力寿を放ちたまえ」と差し招きつつ呼び張るにぞ、下貝は力寿を捕らえて水際近く泳ぎ着き、力に任して投げ上げれば、力寿は浜辺に伏し転び、水を吐く事おびただし。大箱、夏女諸共に助けて水を吐かせしかば、ようやく我に返りにけり。その隙に下貝は覆りし船を押し起こし、船げたに括り付けたる単重衣を絞りもあえずうち着て、汀に船を繋ぎ、さて大箱らに対面して事の由を尋ねれば、大箱は隅田川の辺にて横鯛に名乗り合いし事の趣を告

げ知らせ、紙入れに納め置きたる横鯛の文を取り出して、やがて下貝に渡せしかば、下貝は喜んで感謝に絶えず、
「さても御身は世に隠れ無き春雨の刀自にて御座せしよな。夏女の刀自も名は聞きながら、初めて見参に入りはべる喜びこれに増すもの無し。姉横鯛に異ならず、思し召し下されよ」と云いつつ額突き敬うのみ。又、他事も無く見えしかば、大箱、夏女も喜んで即座に力寿と下貝に和睦の扱いをする程に、二人の勇婦は今更に否むべくもあらざれば仲直りをぞしたりける。
　その時力寿は下貝にうち向かい、
「我が二柱の姉御前の扱いなれば何事も得あわせず。和女郎は我れに水を飲まして、さこそ満足なるべけれ。陸にて手出しをする事なかれ」と云うを下貝は聞きながら、
「和女郎も我らの肩先を砕けるばかりに打ちしかば、さぞ満足にあらんずらん。船にて手出しをする事なかれ」と云いつつどっとうち笑えば、力寿も笑いを催しけり。
　その時下貝は大箱にうち向かって、
「鯛を求めたまうならば、いくらにても参らすべし」と云いつつ浜辺にかかりたる漁船の方に赴き、目の下二尺ばかりなる大鯛を二三枚引き下げ来て、
「これを肴に酒盛りして遊びたまえ」と差し示せば大箱、夏女ら喜んで、力寿、下貝諸共に又、染馴屋へ誘いつつ、彼処の小者に鯛を渡して、或るいは刺身、或るいは浜焼き、旨煮なんどと様々に料理しつ。すなわちそれを肴にして、過ぎ越し方を物語り、各々ひどく酔うまでに盃を巡らし興に入りこの日をここに暮らしけり。

　かくて大箱はその夜宿所へ立ち帰り、酔ったるままに暇睡をせしが、その暁より腹痛み、或るいは戻し、或るいは下す。病症は食傷の如くなれば、此は昨日彼の鯛が旨きままに多く食べ、当てられたるにあらんずらんと思いつつ臥して居る程に、次の日の真昼頃に下貝は又、大きなる鯛二枚をもたらして大箱の宿所に来にけるが、大箱は病気起こって、一人打ち臥し居るを見て、驚く事▼大方ならず、
「まず早医師を招き寄せ、薬をすすめん」と云いけるを大箱は押し止めて、
「さまでの事にはあらざるに、加味平胃散（漢方胃薬）を用いれば大方は癒ゆるならん。去年もかかる事ありしを彼の薬にて早く癒えたり。薬種屋に赴いて、買い取りてたべ」と云うに下貝は心得て、その薬を買い持て来て、煎じて大箱にすすめつつ、
「さて、参らせんとて持て来たる鯛をば、いかが致さん」と問うを大箱聞きながら、
「その鯛は鍵介主と錠八主へ贈りたまわれかし。彼の人たちは日頃より私をいたわる真心あり。始め宿所を当て行なわれて、今この小屋に住まいすなるは彼の人々の情けにこそ」と云うに下貝は心を得て、その鯛を鍵介と錠八の宿所へ持て行って、大箱が贈りし由の口上を述べて帰るさに、更に夏女の宿所へ立ち寄って、大箱の病をしかじかと告げ知らして、やがて家路に帰りけり。

○さる程に夏女は力寿と諸共に大箱の病を訪うて、粥をすすめ薬をすすめ、力寿を日夜付け置いて、その身も朝夕に訪れて、いとまめやかに看病す。かかりし程に下貝も生業の暇ある毎に来つつ大箱を看取る事、およそ十日余りにして病は怠り果てにけり。これより又、大箱は夏女、力寿、下貝らといよいよ親しく交わるに、いかにかしけん五六日、下貝も夏女も力寿すら来ざりしかば、大箱

は只一人徒然と慰めかねて、漫ろに宿所を立ち出て、夏女を訪うに折が悪くて未だ御館より帰らずと聞こえしかば、やがて踵を巡らして下貝の宿に赴くに、彼女も又、家に居らず、力寿すら何処行きけん。一人の友にも会わざりければ、いよいよ興を失って、小智八幡☆の浦伝いを心ともなく帰り来るに、八幡の浜辺の房野出岬と云う所に扶桑楼と呼びなして、ここらに名高き酒楼あり。会席料理に手を尽くすその塩梅は京鎌倉に劣らず、高楼の造り様は物好きを旨とせし由、予て人伝に聞きながら、まだこの名楼に遊ばねば、いざやしばらく立ち寄って後の語り草になさばやとて、そのまま内に進み入り、その二階に上る程に給仕の小者が出迎えて、

「お客は一人にましますか。何をがな参らせん」と問うを大箱は聞きながら、▼

「何と指したる物は無し。良き酒と旨き肴を多く持て来てすすめよ」と云うに小者は心得て、時を移さず酒肴を置き並べてぞすすめける。大箱はあちこと走り回りて飢えもしつ、且つ此の所の眺め妙にして、下総、相模、伊豆までも一目に見渡す絶景なるに、時は水無月（六月）の末にして暑さ燃えるが如くなるも、ここに在りては夏を覚えず、かれと云いこれと云い、さすがに興無きにあらざれば、しきりに盃を傾けて思わずひどく酔いにけり。

　その時大箱は頭を巡らし辺りを見るに、ここに遊びし文人墨客の巧みなるも拙きも詩を題し歌を詠じて壁に書き留めたるのが、これかれとなく多くあり。大箱これを半ば読み、腹の内に思う様、

「・・・・我が身不幸にして女と生まれ。又、不幸にして罪人となりにたり。しかれども世の中の曲がれるを矯て直に復し、君に忠を尽くさん事は世の英雄に劣るべくは思わず。いでや一筆ここに印して後の形見になさばや」とて矢立ての筆を抜き出して、いささか漢文をもて数行の詞を題せしが、その結句に「他年若冤仇を報う事を得ば、血を扶桑港口に染ん」と云う二句あり。かくてもなお飽かずやありけん。又、三杯を傾けつつ、いよいよ酔いが益々興じて、更に又、その方辺に「亀をあさり、尼をやらいて、よもつ海、我沖中に御世を守らん」と詠じたる三十一文字を書き記して、我ながら詠み得て良しと自負して一人うち笑みけり。

　とかくする程に日は早西に沈みにければ大箱は小者を呼んで、酒肴の値を取らせ、宿所を指して帰り行くに、ひどく酔ったる癖なれば、一歩は高く一歩は低く、只ひょろひょろとよろめいて我が住む小屋にたどり着き、そのまま倒れ伏したるが、明けの朝に至っては扶桑楼の白壁に彼の詩歌を書き付けし事などは遂に覚えず、後々までもうち忘れて、ちっとも懸念せざりけり。

〇ここに又、下総の国千葉の郡浜野の里に坂根一犬と云う医師あり。彼は先に桜戸に討たれたる亀菊の雑掌富安舳太夫の妻なりし女医師陸船の兄なり。始め妹の縁につれて▼亀菊に取り入り、遂には大内の御医師にならずやとて、をさをさその事を語らいしに、舳大夫も陸船も桜戸に討たれしかば都の縁も絶え果てて、遂に予ての願い叶わず、いと口惜しく思いたりしに、亀菊の従兄弟の新司久影は始めは卑しき者なりしを院が取り立てさせたまいて、上総の国司に為されしかば、坂根一犬は密かに喜び、その身は陸船の兄なる由を披露して常に飯山の館へ参りしに、彼が住む浜野の里は下総の千葉なれども、上総の国と境を交えて飯山へ遠からず、僅かに二里の道のりなれば、或る時は船路を行き来し、又、或る時は徒歩より通い、久影に媚びへつらい、いかでかの人の推挙を頼んで本意を遂げんと思いけり。

　しかるに一犬は心様こそねぢけたれども唐文多く読み浮かめ、学問ある者なるに、久影は無下の文盲なれば密かに一犬に問い聞いて、政治の助けにする事多かり。ここをもて久影は一犬を愛し近

付けて懐小刀にしたりける。

かかりし程に一犬はある日飯山の館へ参りしに、この日は公務の客ありとて久影が会わざりければ、明日又、参らめとて退きいでしに、折から文月（七月）の初めにて残る暑さの耐え難ければ、扶桑楼に立ち寄りつつ、ここにて飯を食べ酒を飲んで、しばらく憩い居る程に先に大箱が壁に題したる詩歌を見て、心に怪しみ、給仕の小者を呼び寄せて、

「この詩歌を記せしは全く女筆と見えたるが能書なり。落款に難波の大葉子とあれば他郷の者なるべし。見知りて居るか、いかにぞや」と問われて小者は頭を傾け、

「この詩歌を書かれしは去ぬる日の事なるが、御察しの如く女なりき。初めて来ぬる客にして、只一人で候いしかば、見知れる者では候わず」と云うに一犬頷いて、硯箱を借り寄せつつ、その詩歌を写し取り、更に又、小者に云う様、

「この壁に書き付けたる詩歌は後に要あらん。人のために消されぬ様に心を付けよ」と囁き示して浜野の里へぞ帰りける。

〇かくて次の日一犬は又、飯山の館へ参りしかば、久影やがて対面して、

「物語りのついでに我れら当国の守護を承りしより、四境無異（無事）にして、士民太平を楽しめども、都の方には返って奇しき風聞あり。和殿は未だ聞かずや」と云われて一犬は小膝を進め、

「そは何事に候やらん。聞たる事は候わず」と云うに久影は声を潜めて、

「近頃洛中の童歌に「寄るやさざ波、波の花、勇む女波は、ももまりやつよ、一人もぬけて、空まで届く、木にも竹にも目がござる」と童らがをさをさ歌えり。これにより陰陽博士に吉凶を問わせたまうに、世を乱さんと欲する者が起こる事あらんと云えり。実に近江の賊が岳には先の将軍頼家の娘、三世とやらんに侍づいて籠もれる勇婦が多しとかや。もしや彼女らに荷担する曲者が国々に隠れ居るべきか。これも又、知るべからず。安房、上総は渡海※の地なり。分けて心を付けよかし」と都より御下知ありと云うに一犬は小首を傾け、

「それにて思い合わせる事あり。それがし昨日御館より帰るさに、しばし暑さを避けん為、房野出岬の扶桑楼に憩い候いしに、彼処の壁に書き付けたる詩歌数多あり。その中に近頃書きたらんとおぼしき詩歌の怪しげなるが候いき。よりて即座に写し取り、彼処の小者にその詩歌を書いたる者の事を尋ね候いしに、絶えて見知らぬ女なり。▼住所も知らずと云い候いき。これ見そなわせとまめだちて、懐紙の間より写し取ったるその詩歌を取り出しつつ呈するに、久影は受け取り押し開き、しばしば見れども、その心を得ず、「和殿、この意を知りたるか」と問えば、一犬眉をひそめて、

「さればその儀に候なり。まず此の歌の心を云えば、「亀をあさり、尼をやらひて、よもつ海」と詠みたる上の句の「亀をあさり」とは亀菊殿を生け捕らんとなり。「尼をやらひて」は尼将軍政子の方を追い失わんとなり。「よもつ海」は四海なり。又、下の句の「我れ沖中に身を守らん」と詠みし沖中は澳中に息長を兼ねたり。神功皇后の御諱を気長足姫尊と申しき。又、御世を守らんと詠みしは御世は三世を兼ねたり。三世はすなわち三世姫を云えるなり。されば亀菊殿を生け捕り、政子の尼を追い失い、四海を保って、気長足姫尊である神功皇后が応神天皇を補佐したまいし如くに三世姫を守護せんとなり。いわんや、又、その詩に他年もし冤仇（恨み／中国語）を報う事を得れば、血を扶桑港口に染めんとあり。冤仇は仇敵なり。扶桑港口は房野出岬なり。これすなわち謀反の詩歌にしてその心を隠せるのみ。且つ落款に難波の大葉子とあり、この名は都の童歌に合えり。つらつら

愚按を巡らし候に、彼の都の業歌に一人も抜けて空まで届くと詠いし一人は一人なり。一人の二字を貫けば、大となるなり。木にも竹にも目がござるとは竹冠りに木を添え、目を添えれば箱の字なり。彼はこれ一人も抜けたる者は大箱なりと云う由なり。しかるにその詩歌の落款に大葉子と印せしは人の視廳を避けん為か、昔藤原の馬養公の御名を宇合と印させたまいし試しもあれば、大箱と大葉子はその文字が異なるのみで一人の名なる事は疑い無し。しかのみならず童歌に寄るやさざ波、波の花と詠いし、さざ波は滋賀と云わん枕言葉、波の花は浪速（難波）なり。滋賀は近江の名所なり、又、彼の童歌に勇む女波はももまりやつよと歌いしは勇婦百八人の事なるべし。この勇婦どもが近江の国をうちなびいて、三世姫に仕える事あるを云うか、その中に難波の大箱と云う者が頭領たるを云うなるべし。かれと云いこれと云い、由々しき大事に候わずや」とその手底（手のひら）※を指す如く、弁に任して説き示せば久影は驚き大息ついて、

「さるにても、その大箱とやらん云う賊婦の在処が知れずば便無き業なり。詮索の手立てがありもやするか」と問われて一犬はちっとも疑義せず、

「それがし昨日浜野に帰って、これかれと人に尋ね問い候いしに、津の国の天野の判官に仕えたりし物書き女に大箱と云う者あり。人を害せし罪により上総へ流されたる由を知れる者あり。これにやあらんと告げられたり」と云うを久影は聞きながら、

「それにて思い出したり。去ぬる頃、難波の天野の判官より送り越したる女流人あり。九十九里浜の流人小屋へ入れ行くべしと云い付けたりしが、大方はその者なるべし。いでいで」と云いかけて近習の輩に下知を伝え、やがて流人帳を▼取り寄せて、あちこちと開き見るに、それの月それの日に天野の判官より送り越したる女流人の大箱と云う者の姓名年の齢まで記し付けてありしかば、久影は額を撫でて喜ぶ事は大方ならず、俄かに女流人預かりの夏女を呼んでしかじかと説き示し、

「その大箱は謀反の骨頂。許かせならぬ罪人なり。汝は女武者を兼帯（兼任）※したる武芸鍛錬の者なれども、侮りて捕りな逃がしそ。組子数多を従えて絡め捕って引き持て来よ。さぁさぁせよ」とぞ急がしける。夏女はこれを承り、心にひどく驚けども気色にも表さず、心得果ててまかりつつ、俄かに組子を呼び集め、

「只今上の仰せによって、斯様斯様の捕り物あり。事の手筈を定めんに、九十九里浜の此方の洲崎の社に集まるべし」と厳かに云い知らして、密かに大箱の宿所へ走り行き、事しかじかと囁き告げれば大箱聞いてひどく驚き、

「実に、去ぬる日扶桑楼にて詩歌を詠ぜし事ありしが、その日はひどく酔いたれば今日までふっと忘れたり。さていかにせん」とばかりに呆れて、分く由も無かりけり。

夏女はしばし頭を傾け、

「よしや御身を落としやるとも、既に白昼の事にしあれば逃れ果つべうもあらずかし。斯様斯様にしたまえば、まず一旦追補を逃れん。これより他に栓術あらず」と云うに大箱喜んで、その謀り事にぞ従いける。

かくて夏女は忙わしく、宿所に帰り身拵えして、洲崎の社頭に赴く程に、組子らは約束を違えず、ここに集いて居り、その時、夏女は合図を定めて、大箱の小屋を押し取り巻かせ、どっとおめいて込み入りつつ、と見れば大箱は黒髪を振り乱し、白き帷子を一つ着て、うつ伏せに伏したるが、たちまち頭をむっくともたげ辺りを睨んで声高やかに、

「そは汝らは何とかする。我はこれ天照大神の神勅を受け奉り、八百萬の神戦の大将たり。

これによって世の中の曲がれる凡夫を攻め潰し、天上へ凱陣す。汝ら我に敵たえば、たちどころに罰を当てん。そこ退かずや」と罵って、擂り粉木締めを結いたるを振り回し、踊り上がって狂う事限り無し。夏女は呆れし面持ちして、

「この女は気違いなり。絡め捕るとも栓無きものぞ」と云えば組子も言葉を揃えて、

「真に宣う事の如く、取るにも足らぬ狂女なり。さるを絡め捕りて引きもて参らせたまうとも、何らの益か候べき。この由申させたまえかし」と云うに夏女は「さなり」と答えて飯山の館に立ち帰り、すなわち国司久影に大箱が狂乱せしその事の体たらくを斯様斯様と告げ知らせ、

「かかれば扶桑楼の白壁に良からぬ詩歌を書きたるも真に逆心があるにはあらず、心の狂いし僻事なるべし。取るにも足らぬ者なれば、絡めて参らするに及ばず、立ち帰りはべりにき」と真しやかに訴えれば久影は聞いて▼笑いつつ、

「さては狂女でありけるよな。さもあるべし、さもあるべし」と答えて夏女をねぎらいつつ退かせんとしてけるをなお方辺にはべりたる板根一犬が押し留め、

「殿、まずしばし待たさせたまえ。彼の大箱の狂乱は真偽未だ知るべからず。引き持て来させて、その体たらくを見そなわしたまえ」と云うに久影その儀に任しつ、再び夏女を呼び返し、又しかじかと云い付けけり。夏女は心に一犬を情け無しと思えども、主命は黙止難ければ再び大箱の宿所に赴き、組子に下知して大箱を矢庭に絡め捕らせつつ、そのまま飯山へ引き行く道にて夏女は大箱に謀り事が行われざる事の趣、医師一犬が云いつる由をしかじかと囁きけり。

※渡海（とかい）：渡航。航海。　※冤（えん）：無実の罪。ぬれぎぬ。

〇さる程に夏女は止む事を得ず大箱を絡め捕り、問注所の局の内に押し据えて、かくと注進する程に、久影は端近く立ち出てこれを見るに、大箱は眼を怒らし罵り狂う事始めの如く、

「我は日の神の勅を受けたる神戦の大将なり。もし私を敬わずば罰を当てて即座に殺さん。早く縛めの縄を解かずや」と罵り猛って止まざりければ、久影も又、呆れ果て、返し遣わさんとしてけるを一犬が屏風の後ろより忙わしく出て、久影に申す様、

「この者久しくかくの如く罵り狂い候えば、これ真の狂女なり。もし又日頃は正気にて今日俄かに狂い候えば、これ偽りの気違いなり。女流人らを召し寄せて、問わせたまはば分明ならん」と云うに久影、「実にも」と悟って、女流人らを呼び集め、大箱の狂乱は何時の頃よりの事ぞと問うに、女流人ら皆答えて、

「我々一つ小屋にあらねば、定かには知らずはべれども、大箱は昨日まで気が違いしとは見えざりき。今日俄かに病起こりて▼狂いはべるにこそ」と云うと、久影は聞いてあざ笑い、

「さては一犬の推量に違わず、彼奴は空気違いに疑い無し。もし痛く打ち懲らさずば、いかにして実を吐くべき。さぁ打たずや」と激しき下知に組子ら等しく立ち掛かり、大箱を取って押し伏せ、藤葛を寄り合わしたる鞭を持って続け様に背をひどく打つ程に、大箱はなおしばらく苦痛を忍んで、始めの如く狂い罵りたりけれども、皮破れ肉現れて血潮が背を浸せしかば、遂に苦痛に耐えずして、「白状、仕つらん」と叫ぶになん。久影は下知して呵責の鞭を止めさせて、その云う由を聞くに大箱すなわち陳ずる様、

「私は去ぬる日、一人扶桑楼にて酒を飲み、ひどく酔い、しかじかと詩歌を壁に書き付けたれども、元より野心あるにあらず。全く酩酊して心乱れしに筆すさみはべる」と云う。これによって久影は

大箱に重き首枷を掛けさせて、厳しく牢屋に繋ぎ置かせ、さて一犬をいたく誉めて、
「此の度、都の童歌に符合する賊婦を絡め得たる事は全く和殿の大功に寄れり。この由を都へ聞こえ上げ、立身の儀を計らうべし」と云うに一犬は喜んで、うやうやしく額を突き、
「それがしは殿の懇命をこうむり奉り、親しく召され候えば、寸忠を尽くせるのみ。さるを都へしかじかと聞こえ上げさせたまわん事は幸い望みの他にいでて、此上無き御恩に候べし」と答えて浜野へぞ帰りける。

〇かくて久影は尚侍の女武者所の亀菊殿に聞こえ上げる一封の呈札を書きしたため、大箱の事の趣、並びに坂根一犬の働きの由をつぶさに載せて用意も既に調いしかば、やがて夏女を呼び寄せて、大箱の事を都へ訴え申す由を説き示し、
「汝は女なれども武芸をよくして、且つ早走りの聞こえあり。よって此の度、都へ遣わす使いを申し付けるなり。早く旅装いを調えて上京すべし」と命じつつ、その呈書を渡して路用の金さえ取らせしかば、夏女は異議無く言承け(返答)しつつ、やがて宿所に退いて、力寿を呼んで大箱の事の趣を告げ知らせ、
「私は守の御遣いを承まわって、俄かに都へ上るなり。立ち帰り来る日まで、よく大箱の刀自に仕えて、日々に食べ物を贈り参らせよ。しばしもなおざりにすべからず」と云うに力寿は頷いて、
「そは心得てはべるなり。誰にもあれ大箱の刀自を▼酷くする奴あれば、細首を引き抜き捨てはべらん」と云うを夏女は押し止め、
「かかる時に荒気を出せば、なお災いを重ねる元なり。慎んでよく仕えよ」と諭して密かに牢屋に赴き、大箱に斯様斯様と都へ上る由を告げ知らせ、
「私は彼の地に至れば、ともかくも拵えて、御身を救わんと思うのみ。自ら愛して吉報を待ちたまいね」と頼もしく云うに大箱は頷くのみで、いとど別れを惜しみけり。
　されば力寿はその日より、牢屋の辺を去らずして、三度の食を贈り、大箱を問い慰め、いとまめやかに仕える程に、鍵介、錠八らも皆大箱を哀れんで、金創(切り傷)※の薬を贈り、又、獄卒に心得さして、首枷をさえ外させければ、大箱は鞭の傷癒えて、させる苦しみも無かりけり。

〇さる程に夏女は旅装いを調えて、四つの甲馬を腿に繋ぎ、中山道より近江を経て、早く都へ至らんとて、しきりに道を急ぐ程に、一日に八十里の道を走って、次の日近江の湖水の辺を過ぎりけり。これより後の物語りは第九編に著わすべし。此の編の口絵に見えたる植梨、彫妙、抜糸らが後は第九編につぶさなり。来る春を待ちたまえかし、目出度し、目出度し。

＜翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三　禁転載　底本／早稲田大学図書館所蔵資料＞